

原文対訳ヘーゲル弁証法

編者・訳 三枝博音

凡例

- ・底本では訳文は、縦書きで右頁にあったが、横書きで、左頁にした。
- ・底本における旧字旧仮名遣いは、新漢字新仮名遣いに改めた。
- ・底本とはページ区切りが異なっている。できるだけ段落ごとに改ページをする方針で構成し、無理な箇所は文章で切った。文末に”→”とあるのは段落が以下に続くことを示す。
- ・訳注は底本では、まとめて全体の末尾にあったが、頁毎に入れた。
- ・ドイツ語文は、ネット上に公開されている文からコピーした。例えば、"urthei"と"urtei"というようにドイツ語の旧字体の違い、或いは、"ueber"と"über"の差などはチェックしていない。従って混在している。
- ・ドイツ語文での隔字体（ゲシュペルト）部分は、訳では圈点が打たれていたが、**太ゴシック体**に換えた。
- ・ドイツ語文の行末が不揃いであるが、PDF作成上ゲシュペルトを保つためである。
- ・文中【】はすべて作成者の挿入。ドイツ語文中[]とあるのは、底本のドイツ語に対してネット上の文献との相違、あるいは訳出されていない箇所を示す。（ドイツ語チェックに懸かったものだけ調査した。）
- ・頁末の—で区切られた脚注は作成者によるものである。
- ・ドイツ語文の冒頭及び目次頁の引用箇所の表示は作成者によるもの。
- ・ルビは底本にいくつかあるが、追加したものもある。「プラトー」は「プラトン」に換えた。いくつかの送り仮名を現代的に換えた。
- ・底本にあった明らかな誤植は注記なしに換えた。

目次

編者序

一 矛盾に就いて

大論理学第二部第一編第二章 矛盾 附注三

二 弁証法

大論理学第三部第三編理念 第三章絶対的理念から

三 論理的なものの三側面

エンチクロペディ第一編論理学 予備概念 論理学の詳細の概念と区分

四 純粹有の弁証法

エンチクロペディ第一編論理学 有論 純粹有 補遺第二

五 質と量及びその転化

エンチクロペディ（第二版）第一編論理学 有論 度合

六 悟性に於ける移行作用

エンチクロペディ第一編論理学 第214節 注

七 絶対的理念

エンチクロペディ第一編論理学 第三部概念論 C 理念 c 絶対的理念

八 実践的態度と理論的態度

法の哲学 第四節補遺

九 弁証法断片

(1) (3) 法の哲学から (2) エンチクロペディーから

本書を読む人々のために

編者序

本書は、弁証法に関するヘーゲル自身の論述を、ヘーゲルの諸々の著作中より摘録し、且つその邦訳を附したるものである。もともこの書はヘーゲル研究会員の討議の資料のために編んだものであって、直接に弁証法そのものに関係ある箇所のみが選び出されている。しかし、ヘーゲルが弁証法そのものについて多少とも纏まって論述した箇所は殆どここに尽されてあると言っていい。さて、編纂の方針について少しく述べて置かねばならない。

今日、ヘーゲルの研究及びその批判の声は至って喧しい。その中心の問題は言うまでもなく弁証法である。然るにこれまでマルクス、エンゲルス、レーニンのそれを除くならば、ヘーゲル弁証法の解釈はあられもない方面を彷徨していた。現在も亦そうである。これは従来のヘーゲル学徒からヘーゲル弁証法に寄せられた純然たる『哲学的』な興味が然らしめたものである。希臘^{ギリシャ}以来のあらゆる弁証法論者を遠く斥けてひとりヘーゲルにのみ帰せられるべき弁証法は、顧みられないままになっている。純然たる所謂『哲学的』興味でもってヘーゲルを迎える思想家達は、悉く『精神の現象学』(一八〇七年)の著者としてのヘーゲルに向う。しかし、真にヘーゲルに固有なる弁証法はこの著書に於てでなくて、『論理の科学』(第一卷一八一二年、第二卷一八一六年)、『エネチクロペディー』(一八一七年)、及び『法律哲学』(一八二一年)等の労作にあらわれていると言わねばならない。これについては、この書の末尾に附して置いた『本書を読む人々のために』を参照されたい。『精神の現象学』は『哲学の第一部』に充当するものであろうけれども、ヘーゲルに固有の弁証法は、(萌芽としてならば兎に角)ここには見出すことができない。現代の多くのヘーゲル解釈者達は、『精神の現象学』の中に弁証法の好き表言が豊富に見出されると考えているけれども、それは真に弁証法の特にヘーゲル的なるものを理解しないがための謬見である。

編者は以上の顧慮に基づいてこの摘録を編んだ。はじめ『現象学』よりも、弁証法に関係ある箇所を抄訳したけれども、途中に於てこれを除いた。第二の『ヘーゲル弁証法』を編む機会を得たならば、何よりも先きに『現象学』に於ける弁証法的思想と『エンチクロペディー』に於ける弁証法とを比較し呈露せしめるつもりである。『エンチクロペディー』はレオポルド・フォン・ヘンニング編纂の第二版によった。それは第二版は各節にかなり多くの補遺が附加されていて、難解なヘーゲルの諸洞察を容易に人に掴ませるからである。エンゲルスが、ヘンニングのヘーゲル無理解を憐みつつも、この第二版をヘーゲル研究者に推称した所以はここにある。目次全般の順序であるが、これは著作年代の順序に従ったものである。『断片』中の順序は不同である。

本書の編纂及び翻訳に当ったものは筆者であるが、更に磯野駿君が翻訳及校正に入念の助力を注がれたことは筆者の深く謝するところである。

一九三〇年六月十日

三枝博音

一 矛盾について

一 矛盾について

この論文は『論理の科学』（大論理学）第二部第一編第二章中の『矛盾』の節の附注の三より摘出せるものである。ヘーゲルの所謂反省諸規定の一つとしての矛盾に対する理解のためにはこの第二章全体の渉獵が要求せられる。ここに抄録せる附注は、弁証法の把握にとって直接に最も教えること多き箇所に充当する。『論理の科学』第一版序文の日附は一八一二年三月二十二日、第二版の序文のそれは一八三一年十一月七日であつて彼の終焉の日に先だつ僅に一週間である。

矛盾を同一性と同様に、本質的且内面的なる規定ではないかの如くに見做すは、従来の論理学及び普通の表象の根本的偏見の一つである。否、若し茲に順位が問題となり、且つこの二つの規定が別々の規定として固執されていいなら、矛盾は一層深いものであり一層本質的なものとせらるべきであらう。何故なれば、矛盾に対向せる同一性は單純なる直接的なもの、死せる存在の規定に過ぎない。然るに矛盾は一切の運動と生命性の根である。或物は自分自身の中にひとつの矛盾を有する限りに於てのみ、自ら動き、衝動と活動を有つ。

矛盾は或る場合は諸の事物から、存在するもの及び眞実なるもの一般から、遠ざけられる。かくて**矛盾せるものは一切存在しない**かの如くに主張せられる。又他の場合にはこれに反して、矛盾は、關係作用及び比較作用によって始めて矛盾を定立し得ると主張するところの主観的反省の中に押しやられる。ところが実はこの反省の中にすらも矛盾は本当には存在しはしないのだそうだと、何故なれば**矛盾するものは表象されることもできず思惟されることもできぬ**からというので。〔かくて〕矛盾は、それが現実的なものにつけてであらうと若しくは思惟する反省の中であらうと、一つの偶然、謂わば一つの変態であり、一時の病的亢進の類いだと、一般に通っている。

Widerspruch

“Wissenschaft der Logik”

Zweites Buch. *Das Wesen.*

Erster Abschnitt. *Das Wesen als Reflexion in ihm selbst.*

Zweites Kapitel. *Die Wesenheiten oder die Reflexions-Bestimmungen*

C. *Der Widerspruch.*

Anmerkung 3.

Es ist aber eines der Grundvorurteile der bisherigen Logik und des gewöhnlichen Vorstellens, als ob der Widerspruch nicht eine so wesenhafte und immanente Bestimmung sei, als die Identität; ja wenn von Rangordnung die Rede, und beide Bestimmungen als getrennte festzuhalten wären, so wäre der Widerspruch für das Tiefere und Wesenhaftere zu nehmen. Denn die Identität ihm gegenüber ist nur die Bestimmung des einfachen Unmittelbaren, des toten Seins; er aber ist die Wurzel aller Bewegung und Lebendigkeit; nur insofern etwas in sich selbst einen Widerspruch hat, bewegt es sich, hat Trieb und Tätigkeit.

Der Widerspruch wird gewöhnlich fürs erste von den Dingen, von dem Seienden und Wahren überhaupt, entfernt; es wird behauptet, daß es nichts Widersprechendes gebe. Er wird fürs andre dagegen in die subjektive Reflexion geschoben, die durch ihre Beziehung und Vergleichung ihn erst setze. Aber auch in dieser Reflexion sei er nicht eigentlich vorhanden, denn das Widersprechende könne nicht vorgestellt noch gedacht werden. Er gilt überhaupt, sei es am Wirklichen oder in der denkenden Reflexion, für eine Zufälligkeit, gleichsam für eine Abnormität und vorübergehenden Krankheitsparoxysmus.

一 矛盾について

さて、**矛盾は存在しない**、矛盾はひとつの存在事実ではない、という主張に関しては、吾々はこの種の確証沙汰を気にする必要はない。本質^(注一)の絶対的規定は一切の経験の中になければならない、どの概念の中にも同様、一切の現実的なものの中になければならぬ。先きに^(注二)、有の領域に於てあらわれる矛盾であるところの**無限なもの**に於ても、同様なことが想い起されている。日常の経験がすでに、矛盾せる諸事物、矛盾せる諸制度の**多数の存在すること**、且つその矛盾は単に外的反省中にあるのではなくて、それら自身の中に存することを、それ自身語っている。けれども矛盾はただ此処^{ここ}彼処^{かしこ}に生ずるひとつの異常事と見做さるべきではない、その本質的規定に於ける否定的なものであり、一切の自己運動の原理である、蓋し自己運動は矛盾の表現より以外の何ものからも成立しはしない。外的なる感覚的運動そのものは矛盾の直接的定在である。或物が動くは、それが此の今に於いては此処にありそして他の今に於ては彼処にあるが故ではなく、却ってそれが同一の今に於て此処にあつて而して此処にあらざるが故に、此の此処に於て同時にあり而してあらざるが故である。人々は昔の弁証法論者達^(注三)が、運動に於ける矛盾を指摘したことを、容認せねばならぬ。が併しだからと言って、それがために運動は存在せずということは出て来ない、寧ろ運動は**定在する**矛盾そのものであるというべきである。

注一 ヘーゲル論理学に於ては矛盾は本質諸規定の一つ、而も重要な一つである。

注二 『論理の科学』第一卷第一編第二章C及び第二編第二章Cの節に於て無限性について述べ、既にそこで矛盾にも言及している。

注三 ヘーゲルが屢々語れる如く、エレア学派の人々、殊にツェノン【Zeno】である。

Was nun die Behauptung betrifft, daß es den Widerspruch nicht gebe, daß er nicht ein Vorhandenes sei, so brauchen wir uns um eine solche Versicherung nicht zu bekümmern; eine absolute Bestimmung des Wesens muß sich in aller Erfahrung finden, in allem Wirklichen wie in jedem Begriffe. Oben beim Unendlichen, das der Widerspruch ist, wie er in der Sphäre des Seins sich zeigt, ist das Gleiche bereits erinnert worden. Die gemeine Erfahrung aber spricht es selbst aus, daß es wenigstens eine Menge widersprechender Dinge, widersprechender Einrichtungen u.s.f. gebe, deren Widerspruch nicht bloß in einer äußerlichen Reflexion, sondern in ihnen selbst vorhanden ist. Er ist aber ferner nicht bloß als eine Abnormität zu nehmen, die nur hier und da vorkäme, sondern ist das Negative in seiner wesenhaften Bestimmung, das Prinzip aller Selbstbewegung, die in nichts weiter besteht, als in einer Darstellung desselben. Die äußerliche sinnliche Bewegung selbst ist sein unmittelbares Dasein. Es bewegt sich etwas nur, nicht indem es in diesem Jetzt hier ist, und in einem andern Jetzt dort, sondern indem es in einem und demselben Jetzt hier und nicht hier, indem es in diesem Hier zugleich ist und nicht ist. Man muß den alten Dialektikern die Widersprüche zugeben, die sie in der Bewegung aufzeigen, aber daraus folgt nicht, daß darum die Bewegung nicht ist, sondern vielmehr daß die Bewegung der daseiende Widerspruch selbst ist.

一 矛盾について

同様にまた、内的なる・固有の自己運動、**衝動**ⁱ一般（単子の欲求も若しくは活力、絶対的に単一たる実体の活因ⁱⁱ）は、**それ自身中に於ける或物と或物そのものの否定**たる欠乏とが同一の考量中にあること以外の何ものでもない。自己との抽象的たる同一性はまだ何ら生命性ではない、でなくて、肯定的なものが自分自身に於て否定性であり、そのために自己の外に出、自ら変化することが生命性である。だから或物は、それが自分の中に矛盾を含む限りに於てのみ、尚更に矛盾を自分の中に把え且つ持ちこたえる底^{てい}の力である限りに於てのみ、生命的である。併し、存在するものがその肯定的規定に於て同時にその否定的規定を覆い^{つか}掴み、一つの規定を他規定中に固持し、矛盾をそれ自身の中に有する等々の能力なき場合は、それは生ける統一そのものではなく、根拠でもなく、矛盾の中で没落する。——**思弁的思惟**は、思惟が矛盾を、且つ矛盾の中に自分自身を、固持することによってのみ成立するのであって、表象作用に起るが如くに思惟が矛盾から制御せられそして矛盾のために自分の諸規定を僅かに他の諸規定に若しくは無に解消せしめられることによってではない。

i ライプニッツのモナド Monade

ii 「実体の活因」、Wesens（實在・実体）のエンテレケイア（完全な現実態）

Ebenso ist die innere, die eigentliche Selbstbewegung, der Trieb überhaupt, (Appetit oder Nisus der Monade, die Entelechie des absolut einfachen Wesens) nichts anderes, als daß Etwas in sich selbst, und der Mangel, das Negative seiner selbst, in einer und derselben Rücksicht ist. Die abstrakte Identität mit sich ist noch keine Lebendigkeit, sondern daß das Positive an sich selbst die Negativität ist, dadurch geht es außer sich und setzt sich in Veränderung. Etwas ist also lebendig, nur insofern es den Widerspruch in sich enthält, und zwar diese Kraft ist, den Widerspruch in sich zu fassen und auszuhalten. Wenn aber ein Existirendes nicht in seiner positiven Bestimmung zugleich über seine negative überzugreifen und eine in der andern festzuhalten, den Widerspruch nicht in ihm selbst zu haben vermag, so ist es nicht die lebendige Einheit selbst, nicht Grund, sondern geht in dem Widerspruche zu Grunde.--Das spekulative Denken besteht nur darin, daß das Denken den Widerspruch und in ihm sich selbst festhält, nicht aber daß es sich, wie es dem Vorstellen geht, von ihm beherrschen und durch ihn sich seine Bestimmungen nur in andere oder in Nichts auflösen läßt.

一 矛盾について

運動、衝動及びその他にあつては、矛盾は表象作用にとってこれらの諸規定の單純性の中に覆いかくされているが、之に反して**対照的規定**ⁱに於ては矛盾が直接に現れる。上下、左右、父子等々（その他無際限に）の平凡な実例ですらも、悉く対立を一者の中に含んでいる。上は下で**ない**ところのものである。上とは決定的に、下でないという謂に外ならない、而も下なるものがある**限りに於てのみ**あるのである、而してその逆も亦成立つ、一方の規定の中にその反対が存している。父は子の他者であり子は父の他者である、そしてどちらも他者の他者としてのみ存在する。そして同時にその一方の規定は他方の規定に関係してのみ存在する。それらの存在は**一個の**存立である。想うに父は子との関係を外にしても自立的なる或者である。併しその場合彼は父親ではなくて、男子一般である。且つまた上下左右も自己内へ反省されたものであり、関係を外にせる或者である、併しそれは場所一般に過ぎない。――対立せるものは、それが同一の顧慮に於て否定的に相関係し合い、即ち**相互に揚棄し合い**而も互いに**無頓着**である限りに於て、矛盾を含む。表象は、諸規定の**無頓着性**の契機に移り行くもの故、そのために諸規定の否定的統一を見落とし、かくて諸規定を凡そ別々のものとして保有する、別々だという規定に於ては右はもはや右でなく、左はもはや左等々ではないのである。併し表象は実際のところ右と左を目前に持つが故に、表象がこれらの規定に接するや一つの規定は他の規定に於て自己を否定するものとして、而も同時にかかる統一に於て自己を否定するものではなくどの規定も相手かまわず自立的であるものとして、これらの諸規定を目前に持つ。

i Verhältnissbestimmungen : 関係諸規定

Wenn in der Bewegung, dem Triebe und dergleichen der Widerspruch in die Einfachheit dieser Bestimmungen für das Vorstellen verhüllt ist, so stellt sich hingegen in den Verhältnisbestimmungen der Widerspruch unmittelbar dar. Die trivialsten Beispiele, von Oben und Unten, Rechts und Links, Vater und Sohn und so fort ins Unendliche, enthalten alle den Gegensatz in Einem. Oben ist, was nicht Unten ist; Oben ist bestimmt nur dies, nicht Unten zu sein, und ist nur, insofern ein Unten ist; und umgekehrt; in der einen Bestimmung liegt ihr Gegenteil. Vater ist das Andre des Sohnes, und Sohn das Andre des Vaters und jedes ist nur als dies Andre des andern; und zugleich ist die eine Bestimmung nur in Beziehung auf die andere; ihr Sein ist Ein Bestehen. Der Vater ist außer der Beziehung auf Sohn auch etwas für sich; aber so ist er nicht Vater, sondern ein Mann überhaupt; wie Oben und Unten, Rechts und Links auch in sich reflektierte, außer der Beziehung etwas sind; aber nur Orte überhaupt.--Die Entgegengesetzten enthalten insofern den Widerspruch, als sie in derselben Rücksicht sich negativ auf einander beziehende oder sich gegenseitig aufhebende und gegen einander gleichgültige sind. Die Vorstellung, indem sie zum Momente der Gleichgültigkeit der Bestimmungen übergeht, vergisst darin ihre negative Einheit und behält sie somit nur als Verschiedene überhaupt, in welcher Bestimmung Rechts nicht mehr Rechts, Links nicht mehr Links u.s.f. ist. Indem sie aber Rechts und Links in der Tat vor sich hat, so hat sie diese Bestimmungen vor sich als sich negierend, die eine in der andern, und in dieser Einheit zugleich sich nicht negierend, sondern jede gleichgültig für sich seiend.

一 矛盾について

それ故表象作用は勿論到處矛盾をその内容とする、併しそれを意識するに至らない。外的反省に止って居る、外的反省は同等性^(注四)から不同等性へと移り、若しくは否定的關係から、區別されたものの自己内への反省有へと移り行くものである。外的反省はこれらの兩規定を夫々外的に向い合わせる、そしてただ兩規定を意とするのみで、本質的なもの且つ矛盾を含むものである所の**移り行き**を意としない。——ここで序でに述べれば、之に反して**才氣充溢**の反省は矛盾の把握及び言表に於て成立する。もとよりこの反省も事物及び事物の諸關係の**概念**を表現せず、ただ表象諸規定のみをその材料並びに内容とするけれども、それらの表象諸規定をば、それらの諸規定の矛盾を含み且つこの矛盾を**通じて**その概念を**映出せしめる**ような一つの關係に入れるものである。——併し**思惟する理性は**、謂わば差別的なものの鈍く丸められた區別・表象の単なる多様性を**本質的區別即ち対立**に尖鋭化す。——多様なものは、矛盾の尖端に驅り上げられて始めて、互いに澁澁となり生動的となる、そしてこの矛盾中に自己運動及び生命性の内棲的な脈動であるところの否定性を保有する。

注四 ヘーゲルに於ては同等性と同一性は似てもつかぬものである。恰も區別が不同等性と異ると同様である。同等性と不同等性とは外的反省に属すべき差別性の関心に於て成り立つ対立にて、矛盾従って弁証法の成立する分野ではない。

i "inwohnende": 内在的

Das Vorstellen hat daher wohl allenthalben den Widerspruch zu seinem Inhalte, kommt aber nicht zum Bewusstsein desselben; es bleibt äußerliche Reflexion, die von der Gleichheit zur Ungleichheit, oder von der negativen Beziehung zum Reflektiertsein der Unterschiedenen in sich, übergeht. Sie hält diese beiden Bestimmungen einander äußerlich gegenüber und hat nur sie, nicht aber das Übergehen, welches das Wesentliche ist, und den Widerspruch enthält, im Sinne. --Die geistreiche Reflexion, um diese hier zu erwähnen, besteht dagegen im Auffassen und Aussprechen des Widerspruchs. Ob sie zwar den Begriff der Dinge und ihrer Verhältnisse nicht ausdrückt und nur Vorstellungsbestimmungen zu ihrem Material und Inhalt hat, so bringt sie dieselben in eine Beziehung, die ihren Widerspruch enthält und durch diesen hindurch ihren Begriff scheinen läßt.--Die denkende Vernunft aber spitzt, so zu sagen, den abgestumpften Unterschied des Verschiedenen, die bloße Mannigfaltigkeit der Vorstellung, zum wesentlichen Unterschiede, zum Gegensatze, zu. Die Mannigfaltigen werden erst, auf die Spitze des Widerspruchs getrieben, regsam und lebendig gegen einander, und erhalten in ihm die Negativität, welche die inwohnende Pulsation der Selbstbewegung und Lebendigkeit ist.

二 弁証法

『論理の科学』(大論理学)は有・本質・概念の三部に分れている。その第三部が(他の二部と同様)三編に分れ、主観性・客観性・理念がこれに充当して取扱われ、第三編理念は更に生命・認識作用の理念・絶対的理念の三章に分れている。『論理の科学』の最後の章『絶対的理念』の中でヘーゲルは弁証法に就て直截に語っている。ここに抄録せるものはまさにこの部分である。

弁証法ⁱは、現代の形而上学に於て、尚又一般に古代及び近代の通俗哲学によって最も誤解されているところの古い科学の一つである。**ディオゲネス・ラエルチウス**^(注五)は**プラトン**に就てこう言う、タレスが自然哲学の創唱者であり、ソクテラスが道徳哲学の創唱者である如く、プラトンは哲学に属する第三の科学即ち**弁証法**の創唱者であると、――これは、古代から然る故を以て最高のものとしてプラトンに帰せられたところの・が併しプラトンを最もよく口にする人々から屢々全然閑却せられている一つの功蹟である。人々は弁証法を屢々ひとつの**技術**だと見、恰も弁証法は或る主観的**才能**に基き、概念の客観性には属しないかの如くに考える。弁証法がカント哲学に於て如何なる形体【Gestalt 形態】と如何たる成果とを勝ち得たかは、カント哲学の見解の判然たる諸実例に於てすでに示されている。弁証法が再び理性にとって必然なるものとして認められたことは、勿論そこから生じたところのものに対して真反対の結果が引き出されなければならないのだけれども、限りなく重大なる進歩と見做されねばならない。

注五 希臘の思想家、有名なる哲学者の伝記及び学説に関する著書(十巻)を以て知られる。第三世紀の人。

i 直前の省かれた文(右記)にあるように、否定的契機としての弁証法から入っている。広義の弁証法の説明からは始めているのではないことを、念頭に。

Dialektik

“Wissenschaft der Logik”

Zweiter Teil. *Die subjektive Logik oder Lehre vom Begriff.*

Dritter Abschnitt. *Die Idee.*

Drittes Kapitel. *Die absolute Idee.*

[2. Die konkrete Totalität.....

Dieses so sehr synthetische als analytische Moment des Urtheils, wodurch das anfaengliche Allgemeine aus ihm selbst als das Andere seiner sich bestimmt, ist das dialektische zu nennen.] Dialektik ist eine derjenigen alten Wissenschaften, welche in der Metaphysik der Modernen, und dann überhaupt durch die Popularphilosophie, sowohl der Alten als der Neuern, am meisten verkannt worden. Von Plato sagt Diogenes Laertius, wie Thales der Urheber der Natur-Philosophie, Sokrates der Moral-Philosophie, so sei Plato der Urheber der dritten zur Philosophie gehörigen Wissenschaft, der Dialektik gewesen;--ein Verdienst, das ihm vom Altertume hiermit als das Höchste angerechnet worden, das aber von solchen oft gänzlich unbeachtet bleibt, die ihn am meisten im Munde führen. Man hat die Dialektik oft als eine Kunst betrachtet, als ob sie auf einem subjektiven Talente beruhe, und nicht der Objektivität des Begriffes angehöre. Welche Gestalt und welches Resultat sie in der kantischen Philosophie erhalten, ist an den bestimmten Beispielen ihrer Ansicht schon gezeigt worden. Es ist als ein unendlich wichtiger Schritt anzusehen, daß die Dialektik wieder als der Vernunft notwendig anerkannt worden, obgleich das entgegengesetzte Resultat gegen das, welches daraus hervorgegangen, gezogen werden muß.

i 「このような**判断**の総合的でもあり分析的でもある契機によって、初めの普遍的なものはそれ自身から**それに対するもの他のもの**として自己を規定する。こうした契機が**弁証法的契機**と呼ばれるべきものである。」山口祐弘訳。

二 弁証法

弁証法は普通に偶然的な或るものだと人々に見えること以外に、弁証法は次のような一層**きまった**ⁱ形態を持ちがちである、即ち何か或る対象例えば世界・運動・点等々について、それには何か或る規定例えば上述の諸対象の順序に従って言うならば、空間或いは時間に於ける有限性、**この場所**にあるということ、空間の絶対的否定、等の規定が帰せられる、——ところが更に同じく必然的に真反対の規定が、例えば空間及び時間に於ける無限性、この場所にはないということ、空間への関係従って空間性、等の規定が帰せられる。旧きエレア学派は特にその弁証法を運動に対して適用した、プラトンは屢々彼の時代の、殊にソフィスト達の有する表象や概念に対して、併し亦諸の純粹範疇及び反省規定に対しても適用した。完成せる後の懷疑派^(注六)は弁証法を所謂意識^{しんげん}の直接的事実や日常生活の箴言^{しんげん}に關してのみならず、すべて科学的概念へも拡張した。さて、かかる弁証法から引き出された結論は、一般に**矛盾**、及び提説された諸主張の**無意義**である。併しこの結論は二重の意味に於て起り得る、——すなわちかくの如くにしてそれ自身自己に矛盾する**対象**は、無効となり空であるという客観的意味に於てか、——これが、例えば世界・運動・点に**真理性**が拒まれることとなるかのエレア学徒の帰結であつた、——若しくはしかし、**認識作用が不完全である**という主観的意味に於て。後の方の結論では、一方では、嘘^{うそ}の見せかけの奇術を演じて見せるものこそこの弁証法だというように理解される。→

注六 ピロン、ティモン等に対しエネシデム、セクスツス・エンピリクス等を指す。エンピリクスの懷疑論の如きは、實質上よりして今日のプラグマチズムに比せられている。

i "diese nähere Form" 強調はない。「次のような詳細な形式」

Außerdem, daß die Dialektik gewöhnlich als etwas Zufälliges erscheint, so pflegt sie diese nähere Form zu haben, daß von irgend einem Gegenstande, z.B. Welt, Bewegung, Punkt u. s. f. gezeigt wird, es komme demselben irgend eine Bestimmung zu, z.B. nach der Ordnung der genannten Gegenstände, Endlichkeit im Raume oder der Zeit, an diesem Orte sein, absolute Negation des Raumes; aber ferner ebenso notwendig auch die entgegengesetzte, z.B. Unendlichkeit im Raume und der Zeit, nicht an diesem Orte sein, Beziehung auf den Raum, somit Räumlichkeit. Die ältere eleatische Schule hat vornehmlich ihre Dialektik gegen die Bewegung angewendet, Plato häufig gegen die Vorstellungen und Begriffe seiner Zeit, insbesondere der Sophisten, aber auch gegen die reinen Kategorien und Reflexions-Bestimmungen; der gebildete spätere Skeptizismus hat sie nicht nur auf die unmittelbaren sogenannten Tatsachen des Bewusstseins und Maximen des gemeinen Lebens, sondern auch auf alle wissenschaftlichen Begriffe ausgedehnt. Die Folgerung nun, die aus solcher Dialektik gezogen wird, ist überhaupt der Widerspruch und die Nichtigkeit der aufgestellten Behauptungen. Dies kann aber in doppeltem Sinne Statt haben,--entweder im objektiven Sinne, daß der Gegenstand, der solchermaßen sich in sich selbst widerspreche, sich aufhebe und nichtig sei;--dies war z.B. die Folgerung der Eleaten, nach welcher z.B. der Welt, der Bewegung, dem Punkte die Wahrheit abgesprochen wurde;--oder aber im subjektiven Sinne, daß das Erkennen mangelhaft sei. Unter der letztern Folgerung wird nun entweder verstanden, daß es nur diese Dialektik sei, welche das Kunststück eines falschen Scheines vormache.

二 弁証法

これは所謂健実たる人間悟性の通常の見解である、人間の悟性は**感覺的明証**や**日常の表象**及び**分別**に固執するもので、時には――犬儒ディオゲネスが、運動の弁証法を黙ってあちこち歩むことによってその弱点を^つ発いた如くに――穏やかに、併し屢々弁証法を馬鹿げたことだと怒るか、或いはまた若し道義的に重大な対象に関する場合は、もともと確固たるものを動搖させようと試み背徳者に口実を持たせることを教える不埒なことだとして怒るものである、――これはソクラテ斯的弁証法の中でソフィスト的弁証法に対して出て来る見解であり、そして逆に更にソクラテス自身にとってその生命^{あた}を蝕いた憤怒である。ディオゲネスがやったように思惟に**感覺的意識**を対立させそしてこの意識の中に真理を有すと考える卑賤なる反ばくは、人はこれを放任せねばならぬ、しかし弁証法が道義的諸規定を揚棄する限り、人は理性に対して理性は道義諸規定を、但しその真理性に於て及びその正義の・且亦併しその限界の・意識に於て更に回復することができるであろうと云う信頼を置かねばならぬ。――〔後の方の結論には〕他方に於て、〔次のことが理解される〕主観的無意義という結果は弁証法そのものには関しないで、寧ろ弁証法がそれに対して向けられるところの認識作用に関する、――そして懷疑論の・同様に亦カント哲学の・意味に於て**認識作用一般**に関する。

Dies ist die gewöhnliche Ansicht des sogenannten gesunden Menschenverstandes, der sich an die sinnliche Evidenz und die gewohnten Vorstellungen und Aussprüche hält,--zuweilen ruhiger, wie Diogenes der Hund, die Dialektik der Bewegung durch ein stummes Auf- und Abgehen in ihrer Blöße zeigt, oft aber in Harnisch darüber gerät, es sei bloß als über eine Narrheit, oder wenn es sittlich wichtige Gegenstände betrifft, als über einen Frevel, der das wesentliche Feste wankend zu machen suche, und dem Laster Gründe an die Hand zu geben lehre, --eine Ansicht, die in der sokratischen Dialektik gegen die sophistische vorkommt, und ein Zorn, der umgekehrt wieder selbst dem Sokrates das Leben gekostet hat. Die pöbelhafte Widerlegung, die, wie Diogenes tat, dem Denken das sinnliche Bewusstsein entgegensetzt, und in diesem die Wahrheit zu haben meint, muß man sich selbst überlassen; insofern die Dialektik aber sittliche Bestimmungen aufhebt, zur Vernunft das Vertrauen haben, daß sie dieselben, aber in ihrer Wahrheit und dem Bewusstsein ihres Rechts, aber auch ihrer Schranke, wieder herzustellen wissen werde. --Oder aber das Resultat der subjektiven Nichtigkeit betrifft nicht die Dialektik selbst, sondern vielmehr das Erkennen, wogegen sie gerichtet ist; und im Sinne des Skeptizismus, ingleichen der Kantischen Philosophie, das Erkennen überhaupt.

二 弁証法

この場合に於ける根本偏見は、弁証法は**単に否定的成果を持つのみ**であると考えることである、このことはやがてその詳細な規定を得るであろう。先ず上に挙げたような・弁証法がそれに於て現れるを常とするところの・**形態**【Form 形式】に就ては次のことが注意されるべきである、すなわち弁証法及び弁証法に従って生ずるその成果は、取扱われる**対象**を問題とすることもあり若しくは又主観的**認識作用**を問題とすることもあるⁱ、そして後者を若しくは又対象を空なものと宣言するものである、之に反して**第三者**としての対象に於て示されるところの**諸規定**は注意されることなく、それ自身で妥当するものとして前提されている、ということ。かくの如き**無批判**的操作に対して、**カント**哲学が**思惟諸規定の即自且つ対自的な**考察の意味に於ける論理学及び形而上学の再建への注意を喚起し、且つ衝撃を与えたことは、カント哲学のひとつの無限なる功蹟である。思惟及び概念を除外せる対象はひとつの表象若しくは又ひとつの名目である。思惟諸規定及び概念諸規定こそ、それに於て対象が**本来のすがたを有する**ところのものである。ⁱ

それ故に実際は思惟諸規定及び概念諸規定のみが重要である。これらが理性の真の対象乃至は内容であって、かかる対象及び内容は、若しも人がこれを思惟諸規定及び概念諸規定と区別して理解するならば、思惟諸規定及び概念諸規定を通じて・且つそれらに於て・のみ妥当するのである。→

ⁱ 底本では、訳文はここで改行されているが、ドイツ語原文では改行はない。

Das Grundvorurteil hierbei ist, daß die Dialektik nur ein negatives Resultat habe, was sogleich seine nähere Bestimmung erhalten wird. Zunächst ist über die angeführte Form, in der sie zu erscheinen pflegt, zu bemerken, daß sie und ihr Resultat nach derselben den Gegenstand, der vorgenommen wird, oder auch das subjektive Erkennen betrifft, und dieses oder den Gegenstand für nichtig erklärt, dagegen die Bestimmungen, welche an ihm als einem Dritten aufgezeigt werden, unbeachtet bleiben, und als für sich gültig vorausgesetzt sind. Auf dieses unkritische Verfahren ist es ein unendliches Verdienst der Kantischen Philosophie, die Aufmerksamkeit gezogen, und damit den Anstoß zur Wiederherstellung der Logik und Dialektik, in dem Sinne der Betrachtung der Denkbestimmungen an und für sich, gegeben zu haben. Der Gegenstand, wie er ohne das Denken und den Begriff ist, ist eine Vorstellung oder auch ein Name; die Denk- und Begriffsbestimmungen sind es, in denen er ist, was er ist. In der Tat kommt es daher auf sie allein an; sie sind der wahrhafte Gegenstand und Inhalt im Unterschiede von ihnen versteht, gilt nur durch sie und in ihnen.

二 弁証法

それ故に、ある対象若しくは認識作用がその性状によって、又は外的連結によって、自ら弁証法的なることを示すということは対象がそれとも認識作用の責めであると見做されてはならない。対象及び認識作用はかようにしてひとつの主体として表象されるので、諸の賓辞・性質・独立的普遍の形ちに於ける**諸規定**はこの主体の中に次の如くに持ち来される、即ち諸規定は固定的且つ自立的に正しいものとして、外的で偶然的な結合を通じて・第三者に於て且つ第三者によって・弁証法的関係並に矛盾の中に定立されるという工合に。表象及び悟性のかかる外的な且つ固定的な主体並びに諸の抽象的规定は、**究極のもの**・確実に根底に横たわって恒存するもの・と見做されうる代りに、むしろそれ自身**ある**直接的なもの・まさにかような前提されたもの且つ始まるもの・として考察さるべきである、すなわちそれは**即自的**なる概念と見るべきものであるが故に、先きに指摘された如く即自且つ対自的に弁証法に降服せざるを得ぬものである。そこで確固たるものと認められている一切の対立、例えば有限的なものと無限的なもの、個別的なものと一般的なもの、は何か或る外的結合によって矛盾せるものではなく、その本性の考察が示す如くむしろ即自且つ対自的にそれ自身移行である。綜合、及び諸対立がそれに於て現れる主体は、諸対立の概念の自己固有の反省の産物である。若し没概念的考察が諸対立の外的関係にのみ止まり、それらを孤立せしめ且つ固定的な前提のままにして置くならば、それら諸規定そのものを注目し、その心靈となつてそれを動かし且つその弁証法を産み出すものこそ、むしろ概念である。

i "Begriff an sich" 「概念自体」

Es muß daher nicht als die Schuld eines Gegenstands oder des Erkennens genommen werden, daß sie durch die Beschaffenheit und eine äußerliche Verknüpfung sich dialektisch zeigen. Das eine und das andere wird auf diese Weise als ein Subjekt vorgestellt, in das die Bestimmungen in Form von Subjekten, Eigenschaften, selbstständigen Allgemeinen so gebracht seien, daß sie als fest und für sich richtig erst durch die fremde und zufällig Verbindung in und von einem Dritten, in dialektische Verhältnisse und in Widerspruch gesetzt werden. Ein solches äußerliches und fixes Subjekt der Vorstellung und des Verstandes, so wie die abstrakten Bestimmungen, statt für Letzte, sicher zu Grunde liegende bleibende angesehen werden zu können, sind vielmehr selbst als ein Unmittelbares, eben ein solches Vorausgesetztes und Anfangendes zu betrachten, das, wie vorhin gezeigt, an und für sich selbst der Dialektik unterliegen muß, weil es als Begriff an sich zu nehmen ist. So sind alle als fest angenommenen Gegensätze, wie z.B. Endliches und Unendliches, Einzelnes und Allgemeines, nicht etwa durch eine äußerliche Verknüpfung in Widerspruch, sondern sind, wie die Betrachtung ihrer Natur gezeigt, vielmehr an und für sich selbst das Übergehen; die Synthese und das Subjekt, an dem sie erscheinen, ist das Produkt der eigenen Reflexion ihres Begriffs. Wenn die begrifflose Betrachtung bei ihrem äußerlichen Verhältnisse stehen bleibt, sie isoliert und als feste Voraussetzungen läßt, so ist es vielmehr der Begriff, der sie selbst ins Auge fasst, als ihre Seele sie bewegt und ihre Dialektik hervortut.

三 論理的なものの三側面

三 論理的なものの三側面

この論文はレオポルト・フォン・ヘンニング編纂による第二版エンチクロペディーの第一編『論理の科学』の『予備概念』(Vorbegriff) 中の一章『論理学の詳細の概念と区分』(Näherer Begriff und Eintheilung der Logik) に該当する。但しこの章の最後の一節は省略されてある。因みにエンチクロペディー第一版序文の日附は一八一七年五月、第二版のそれは一八二七年五月二十五日、第三版のそれは一八三〇年九月十九日である。

一

論理的なるものは、形式の上よりして、三つの側面を持っている、(A) **抽象的若しくは悟性的側面**、(B) **弁証法的若しくは消極理性的側面**ⁱ、(C) **思弁的若しくは積極理性的側面**。

これらの三つの側面は論理学の**三部門**を構成するのではない、そうでなく、あらゆる**論理的実有的なるもの**即ちあらゆる概念の、若しくはあらゆる真なるもの一般の**諸契機**である。これら三側面は悉く更に第一契機即ち**悟性的なるもの**の下へ置かれ、そしてこれがために孤立させられて別々なものと做され得るのである、しかしそうなるとこの三つの側面はその真理性に於ては考察されてないのである。〔第七十九節〕

二

(A) **悟性**としての思惟^{ひつきょう}は畢竟、固定的規定性及びその他の規定性に対する区別性を出ないでそれに終始している。而してかかる局限された抽象が、悟性としての思惟にとっては対自的に存続し且つ存在するものとなっている。

i ここに「弁証法的」が入っているように、ヘーゲルは、狭義の意味では**否定的側面**を「弁証法的」と呼んでいる。広義にはこの三側面を含む。

Näherer Begriff und Einteilung der Logik

„Encyklopädie“

Erster Theil. *Die Wissenschaft der Logik*

Näherer Begriff und Einteilung der Logik

§ 79

Das Logische hat der Form nach drei Seiten: α) die abstrakte oder verständige, β) die dialektische oder negativ-vernünftige, γ) die spekulative oder positiv-vernünftige.

Diese drei Seiten machen nicht drei Teile der Logik aus, sondern sind Momente jedes Logisch-Reellen, das ist jedes Begriffes oder jedes Wahren überhaupt. Sie können sämtlich unter das erste Moment, das Verständige, gesetzt und dadurch abgesondert auseinandergehalten werden, aber so werden sie nicht in ihrer Wahrheit betrachtet. [- Die Angabe, die hier von den Bestimmungen des Logischen gemacht ist, sowie die Einteilung ist hier ebenfalls nur antizipiert und historisch.]ⁱ

§ 80

α) Das Denken als Verstand bleibt bei der festen Bestimmtheit und der Unterschiedenheit derselben gegen andere stehen; ein solches beschränktes Abstraktes gilt ihm als für sich bestehend und seiend.

i 「ここで論理的なものの概念と章立てについて述べることは、これまでの叙述全体がそうだが、予め事実を知らせておくというものにすぎない。」長谷川訳

三 論理的なものの三側面

補遺 人が思惟一般について語り、若しくは更に立入って概念作用について語る場合、人は屢々単に悟性の働きに注目しがちである。勿論言うまでもなく思惟は差当って悟性的思惟である。然し思惟はそれだけにとどまらない、概念は単なる悟性規定ではない。——悟性の活動は一般にその内容に普遍性の形式を持たせることによって成立する。ところで悟性によって定立されたる普遍性は、一つの抽象的な普遍性である。かかるものは普遍者として特殊的なものに對立的に固定され、それがために依然として特殊的なものとして規定される。悟性はその対象に対するやいつでも分離的であり抽象的であるがために、悟性は直接的な直観や感覚の真反対のものである、直観や感覚は全く具体的な事物に関し且つそれ以上に出ないから。

人が思惟に対して一般に浴びせがちな屢々繰返された非難、思惟は硬化せる且つ偏狭なものである、思惟は徹底されると有害な且つ破壊的な結果を招くという非難は、悟性と感覚とをかく対立させることに起因する。この非難が内容上正当でありとすれば、何よりも次のように答えるべきである、そのために思惟一般に、精しくは理性的思惟にその非難が負わさるべきでなくて、悟性的思惟のみが負うべきである。しかし、ここで一層重大なことは、何はさて置き悟性的思惟にもその権利と効績が認められねばならぬことである、というは一般に理論的領域にあつても実践的領域にあつても思惟は悟性を欠いたなら如何なる確定性も判明性もこれをかち得ることができないことである。差当り先ず、認識作用についていうと、認識作用はその場合の対象をその区別面から把握^{とら}えることから始まる。例えば自然の觀察でいうと、質料・力・種属が区別せられる。かく区別され孤立させられることによって對自的に固定せしめられる。→

[§ 80]Zusatz. Wenn vom Denken überhaupt oder näher vom Begreifen die Rede ist, so pflegt man häufig dabei bloß die Tätigkeit des Verstandes vor Augen zu haben. Nun ist zwar allerdings das Denken zunächst verständiges Denken, allein dasselbe bleibt dabei nicht stehen, und der Begriff ist nicht bloße Verstandesbestimmung. - Die Tätigkeit des Verstandes besteht überhaupt darin, ihrem Inhalt die Form der Allgemeinheit zu erteilen, und zwar ist das durch den Verstand gesetzte Allgemeine ein abstrakt Allgemeines, welches als solches dem Besonderen gegenüber festgehalten, dadurch aber auch zugleich selbst wieder als Besonderes bestimmt wird. Indem der Verstand sich zu seinen Gegenständen trennend und abstrahierend verhält, so ist derselbe hiermit das Gegenteil von der unmittelbaren Anschauung und Empfindung, die es als solche durchweg mit Konkretem zu tun hat und dabei stehen bleibt.

Auf diesen Gegensatz des Verstandes und der Empfindung beziehen sich jene so oft wiederholten Vorwürfe, welche dem Denken überhaupt gemacht zu werden pflegen und welche darauf hinausgehen, daß das Denken hart und einseitig sei und daß dasselbe in seiner Konsequenz zu verderblichen und zerstörenden Resultaten führe. Auf solche Vorwürfe, insofern dieselben ihrem Inhalt nach berechtigt sind, ist zunächst zu erwidern, daß dadurch nicht das Denken überhaupt und näher das vernünftige, sondern nur das verständige Denken getroffen wird. Das Weitere ist dann aber, daß vor allen Dingen auch dem bloß verständigen Denken sein Recht und sein Verdienst zugestanden werden muß, welches überhaupt darin besteht, daß sowohl auf dem theoretischen als auch auf dem praktischen Gebiet es ohne Verstand zu keiner Festigkeit und Bestimmtheit kommt. Was hierbei zunächst das Erkennen anbetrifft, so beginnt dasselbe damit, die vorhandenen Gegenstände in ihren bestimmten Unterschieden aufzufassen, und es werden so z. B. bei Betrachtung der Natur Stoffe, Kräfte, Gattungen usw. unterschieden und in dieser ihrer Isolierung für sich fixiert.

三 論理的なものの三側面

こうした場合働いている思惟は悟性としてのものである。この場合、同一性換言すれば単純なる自己関係が思惟の原理である。認識作用に於て一つの規定から他の規定に移る場合にこの同一性は制約となっている。これを数学でいうと、**大きさ**（量）は、すべての他の諸規定が閑却されてもって取運ばれる場合の規定である。幾何学に於て人が諸の図形を比較するのは、同一的なものを図形にに於て引立たせているからである。認識作用の他の領域に於てもそうである、例えば法律学に於て、人は差当り同一性に^よ凭って進む。その場合、一つの規定から他の規定へと推定されるがこの推定作用は同一性の原理に依る進行に外ならない。——理論的なものに於てと同様実践的なものに於ても、悟性は欠くことができない。行為には本質的に性格が必要である。性格の人は悟性的な人間である、或る一定の目的に**着目**し、これをしっかりと追及する。大事を志すものは、ゲーテの言う如く、局限することを心得ていなければならぬ。^{これにはんし}反之、一切を志すものは、実際に何をも志さぬ、そして一切を無駄にする。世の中には関心を引く無数のものがある。スペインの詩、化学、政治、音楽、すべて興味多い、それに興味を感じずる誰人をも人は悪く言うことはできない。が併し、一個の人間として一定の事情中であって何事か仕遂げようとするならば、一定の何ものかに固執せねばならぬ。彼の力量を多方面に散乱さしてはならない。どの職業に於てもそうである、職業は悟性でもって営まれる。例えば、裁判官は法律に固執し、これに従って判決を下さねばならぬ。^{うこさべん}右顧左眄し、^{ゆうじよ}宥恕を構えることがあつてはならぬ。→

Das Denken verfährt hierbei als Verstand, und das Prinzip desselben ist die Identität, die einfache Beziehung auf sich. Diese Identität ist es dann auch, durch welche im Erkennen zunächst der Fortgang von der einen Bestimmung zur anderen bedingt wird. So ist namentlich in der Mathematik die Größe die Bestimmung, an welcher mit Hinweglassung aller anderen fortgegangen wird. Man vergleicht demgemäß in der Geometrie Figuren miteinander, indem man das Identische daran hervorhebt. Auch in anderen Gebieten des Erkennens, so z. B. in der Jurisprudenz, geht man zunächst an der Identität fort. Indem hier aus der einen Bestimmung auf eine andere Bestimmung geschlossen wird, so ist dies Schließen nicht anderes als ein Fortgang nach dem Prinzip der Identität. - Wie im Theoretischen, so ist auch im Praktischen der Verstand nicht zu entbehren. Zum Handeln gehört wesentlich Charakter, und ein Mensch von Charakter ist ein verständiger Mensch, der als solcher bestimmte Zwecke vor Augen hat und diese mit Festigkeit verfolgt. Wer etwas Großes will, der muß sich, wie Göthe sagt, zu beschränken wissen. Wer dagegen alles will, der will in der Tat nichts und bringt es zu nichts. Es gibt eine Menge interessante Dinge in der Welt; spanische Poesie, Chemie, Politik, Musik, d. ist alles sehr interessant, und man kann es keinem übel nehmen, der sich dafür interessiert; um aber als ein Individuum in einer bestimmten Lage etwas zustande zu bringen, muß man sich an etwas Bestimmtes halten und seine Kraft nicht nach vielen Seite hin zersplittern. Ebenso ist es bei jedem Beruf darum zu tun, daß derselbe mit Verstand verfolgt wird. So hat z. B. der Richter sich an das Gesetz zu halten, demselben gemäß sein Urteil zu fällen und sich nicht durch dieses und jenes abhalten, keine Entschuldigung gelten zu lassen, ohne rechts und links zu blicken.

三 論理的なものの三側面

——のみならず一般に悟性は訓練の一つの本質的要素である。訓練ある人は曖昧、不定のことに満足しない、対象をしっかりと明晰に把握する。反之、訓練なきものは覚束なげに^{おぼつか}躊躇^{そうろう}している、そういう人と問題となれる事柄について相談し、問題となれる一定の点に判然とわき眼をふらず着目させるには随分骨の折れることである。——

【一段落の省略がある】

さて、以上の説明からここに次のことが論定できる、普通の表象から言えば悟性からは最も遠く隔っているかに見える活動の領域や範囲に於ても悟性は欠如されてはならない、尚又、悟性が欠けていればいるほどそれは不完全なものと見られねばならない。すなわちこのことは、芸術・宗教・及び哲学についても当て嵌まる。例えば、芸術にあつては、概念に応じたる種々なる美の形態がその区別を得て確定され、表現されるということは、悟性の故である。個々の作品に於ても然り。だから、一つの戯曲の美と完成には、種々なる人物の性格が純粹と明劃を保って押し出され、取扱われるところの種々なる目的と関心が明快に且つ判然と表現されるということがなければならぬ。これに次いで宗教の領域に於て言えば、例えば、(内容や理解その他の差別を別とすれば)、希臘の神話が北方神話に優れている所以は前者にあつては個々の神々の形態は彫塑的鮮明をもつて創られているが、それが後者ではぼんやりした不分明の霧の中で流れ合っていることである。——哲学も亦悟性を欠くことのならぬことは、これ迄の説明に依て、尚特に贅言^{ぜいげん}するを要しない。哲学に於ては何は措いても、どの思想も充分劃然と捕捉されねばならず、且つ曖昧な不鮮明な点で諦めてはならぬことが、必須事である。——

- Weiter ist nun überhaupt der Verstand ein wesentliches Moment der Bildung. Ein gebildeter Mensch begnügt sich nicht mit Nebulosem und Unbestimmtem, sondern faßt die Gegenstände in ihrer festen Bestimmtheit, wohingegen der Ungebildete unsicher hin und her schwankt und es oft viele Mühe kostet, sich mit einem solchen über das, wovon die Rede ist, zu verständigen und ihn dazu zu bringen, den bestimmten Punkt, um den es sich handelt, unverrückt im Auge zu behalten.--

Aus der bisherigen Erörterung ist nun ferner zu entnehmen, daß auch in solchen Gebieten und Sphären der Betätigung, die nach der gewöhnlichen Vorstellung dem Verstand am fernsten zu liegen scheinen, dieser gleichwohl nicht fehlen darf und daß in dem Maße, als dies der Fall ist, solches als ein Mangel betrachtet werden muß. Dies gilt namentlich von der Kunst, von der Religion und von der Philosophie. So zeigt sich z. B. in der Kunst der Verstand darin, daß die dem Begriff nach verschiedenen Formen des Schönen auch in diesem ihrem Unterschied festgehalten und zur Darstellung gebracht werden. Dasselbe gilt dann auch von den einzelnen Kunstwerken. Es gehört demgemäß zur Schönheit und Vollendung einer dramatischen Dichtung, daß die Charaktere der verschiedenen Personen in ihrer Reinheit und Bestimmtheit durchgeführt, und ebenso, daß die verschiedenen Zwecke und Interessen, um die es sich handelt, klar und entschieden dargelegt werden. - Was hiernächst das religiöse Gebiet anbetrifft, so besteht z. B. (abgesehen von der sonstigen Verschiedenheit des Inhalts und der Auffassung) der Vorzug der griechischen vor der nordischen Mythologie wesentlich auch darin, daß in der ersteren die einzelnen Göttergestalten zur plastischen Bestimmtheit herausgebildet sind, während dieselben in der letzteren im Nebel trüber Unbestimmtheit durcheinanderfließen. - Daß endlich auch die Philosophie den Verstand nicht zu entbehren vermag, bedarf nach der bisherigen Erörterung kaum noch einer besonderen Erwähnung. Zum Philosophieren gehört vor allen Dingen, daß ein jeder Gedanke in seiner vollen Präzision aufgefaßt wird und daß man es nicht bei Vagem und Unbestimmtem bewenden läßt.--

三 論理的なものの三側面

併し更に、悟性はあまり募らせてはならないとも、言われがちである。その場合の正当さは、悟性的なものは何としても最後のものでなくて、むしろ有限的である。更に精しく言えば悟性的なものは尖端に駆り上げられその反対物に転化する**底**のものであるという点にある。抽象の間を彷徨するは青年の事である、反之人生を経験せる人間は抽象的な**あれかこれか**には眼をくれないで、具体的なものを固持する。〔第八十節〕

三

(B) **弁証法的契機**はかかる諸規定の・固有の自己揚棄作用であり、また、この諸規定に対立せる諸規定への移行作用である。

(1) 弁証法的なるものは悟性から対自的に孤立させられたものだと見做されるとき、特に、それが即ち学的諸概念で呈示せられると、**懷疑論**を構成する、懷疑論は弁証法的なるものの成果 (Resultat) として単なる否定のみを獲得する。→

Ferner pflegt nun aber auch gesagt zu werden, der Verstand dürfe nicht zu weit gehen, und darin liegt das Richtige, daß das Verständige allerdings nicht ein Letztes, sondern vielmehr endlich und näher von der Art ist, daß dasselbe auf die Spitze getrieben in sein Entgegengesetztes umschlägt. Es ist die Weise der Jugend, sich in Abstraktionen herumzuwerfen, wohingegen der lebenserfahrene Mensch sich auf das abstrakte Entweder-Oder nicht einläßt, sondern sich an das Konkrete hält.

§ 81

ß) Das dialektische Moment ist das eigene Sich-Aufheben solcher endlichen Bestimmungen und ihr Übergehen in ihre entgegengesetzten.

1. Das Dialektische, vom Verstande für sich abgesondert genommen, macht, insbesondere in wissenschaftlichen Begriffen aufgezeigt, den Skeptizismus aus; er enthält die bloße Negation als Resultat des Dialektischen.

三 論理的なものの三側面

(2) 弁証法は、普通には、ある外的な術策すなわち、一定の諸概念中に於ける混乱を尚またそれら諸概念中に於ける諸の**矛盾のただ見かけ上の仮象**を、肆意によって呈露せしめる術策であると見られている。かくてこれらの諸規定でなくこの仮象の方が無意義なるものであつて。却つてむしろ悟性的なるものの方が真なるものであるというようになる。弁証法は屢々あちらにつきこちらにつく弁舌の**ぶらんこ**仕掛以上の何ものでもなく、そこには何の実質もなく、無内容がかかる弁舌を生み出す**伶俐**によって装われているものと見做されている。――弁証法は、むしろ悟性諸規定の、物の、有限なるもの一般の固有の、真の、本性として見らるべきである。反省は差当つてまず、孤立されたる規定性を越えて出る超出作用であり、そして又この規定性を相互關係的なものならしめるひとつの關係作用である、併し畢竟するにこの規定性を孤立的妥当作用に於て保持するものである。これに反して弁証法は、**内在的**超出作用である。そこでは悟性諸規定の一面性と局限性とがそれらの本来あるところのものとして即ち悟性諸規定の否定としてあらわれる。一切の有限的なるものはまさに自分自らを揚棄するところのものである。それ故、弁証法的なるものは進行の原動的精神を構成する、且つそれによりてのみ**内在的聯関**と**必然性**とが科学の内容に入り来るところの原理である、有限なるものの、外的にでなくほんとうの乗り越えは、一般に弁証法的なるものの中に存する。

2. Die Dialektik wird gewöhnlich als eine äußere Kunst betrachtet, welche durch Willkür eine Verwirrung in bestimmten Begriffen und einen bloßen Schein von Widersprüchen in ihnen hervorbringt, so daß nicht diese Bestimmungen, sondern dieser Schein ein Nichtiges und das Verständige dagegen vielmehr das Wahre sei. Oft ist die Dialektik auch weiter nichts als ein subjektives Schaukelsystem von hin- und herübergehendem Räsonnement, wo der Gehalt fehlt und die Blöße durch solchen Scharfsinn bedeckt wird, der solches Räsonnement erzeugt. - In ihrer eigentümlichen Bestimmtheit ist die Dialektik vielmehr die eigene, wahrhafte Natur der Verstandesbestimmungen, der Dinge und des Endlichen überhaupt. Die Reflexion ist zunächst das Hinausgehen über die isolierte Bestimmtheit und ein Beziehen derselben, wodurch diese in Verhältnis gesetzt, übrigens in ihrem isolierten Gelten erhalten wird. Die Dialektik dagegen ist dies immanente Hinausgehen, worin die Einseitigkeit und Beschränktheit der Verstandesbestimmungen sich als das, was sie ist, nämlich als ihr Negation darstellt. Alles Endliche ist dies, sich selbst aufzuheben. Das Dialektische macht daher die bewegende Seele des wissenschaftlichen Fortgehens aus und ist das Prinzip, wodurch allein immanenter Zusammenhang und Notwendigkeit in den Inhalt der Wissenschaft kommt, so wie in ihm überhaupt die wahrhafte, nicht äußerliche Erhebung über das Endliche liegt.

三 論理的なものの三側面

補遺 弁証法的なるものを正當に把握し認識することは最も重要事である。弁証法的なるものは一般に、一切の運動、一切の生命、現實に於ける一切の実行の原理である。と共に、弁証法的なるものは又眞に科学的な一切認識作用の靈である。吾々の普通の意識では、抽象的悟性諸規定に固執しないことは単なる公平事と思われている、諺に『自他共に生きろ』と云うが如くに。しかし、精密に言うところである、有限的なるものは単に外から制限されるのではなく、それ自身の本性によって揚棄され、それ自身によってその反対に移る。例えば、人は『人間は死すべきものである』と言う、然るとき死をば、ただ外的事情中にその根拠を持っているものだと考える、この考察法からいうと、生きてい又死んでいることは人間の二つの特殊的性質であるということになる、併し眞當の把握から言えばこうである、ほんとうに生としての生は自分の中に死の萌芽を持っている、そして一般に有限なるものはそれ自身に於て矛盾し、而してこれによって揚棄せられる。――さて、弁証法は單なる**詭弁哲学**と混同されてはならぬ。詭弁哲学の本質は、一面的抽象的な諸規定を、一個人及一個人の特別の事情のその折々の関心が機縁となるに應じて、孤立させ自立的に妥當ならしめる点にある。例えば私は生存している、且つ私は生計の手段を持っていることは、行為に關しては、本質的要素である。が、その場合、こういう一面即ち私の安寧幸福のこの原理を自立的に取り上げ、そしてそこから、私は盗み若しくは売国行為をしていいという帰結を引出すならば、それは詭弁である。→

Zusatz 1. Das Dialektische gehörig aufzufassen und zu erkennen ist von der höchsten Wichtigkeit. Es ist dasselbe überhaupt das Prinzip aller Bewegung, alles Lebens und aller Betätigung in der Wirklichkeit. Ebenso ist das Dialektische auch die Seele alles wahrhaft wissenschaftlichen Erkennens. In unserem gewöhnlichen Bewußtsein erscheint das Nicht-Stehenbleiben bei den abstrakten Verstandesbestimmungen als bloße Billigkeit, nach dem Sprichwort: "leben und leben lassen", so daß das eine gilt und auch das andere. Das Nähere aber ist, daß das Endliche nicht bloß von außen her beschränkt wird, sondern durch seine eigene Natur sich aufhebt und durch sich selbst in sein Gegenteil übergeht. So sagt man z. B.: der Mensch ist sterblich, und betrachtet dann das Sterben als etwas, das nur in äußeren Umständen seinen Grund hat, nach welcher Betrachtungsweise es zwei besondere Eigenschaften des Menschen sind, lebendig und auch sterblich zu sein. Die wahrhafte Auffassung aber ist diese, daß das Leben als solches den Keim des Todes in sich trägt und daß überhaupt das Endliche sich in sich selbst widerspricht und dadurch sich aufhebt. - Die Dialektik ist nun ferner nicht mit der bloßen Sophistik zu verwechseln, deren Wesen gerade darin besteht, einseitige und abstrakte Bestimmungen in ihrer Isolierung für sich geltend zu machen, je nachdem solches das jedesmalige Interesse des Individuums und seiner besonderen Lage mit sich bringt. So ist es z. B. in Beziehung auf das Handeln ein wesentliches Moment, daß ich existiere und daß ich die Mittel zur Existenz habe. Wenn ich dann aber diese Seite, dieses Princip meines Wohles für sich heraushebe und die Folge daraus ableite, daß ich stehlen oder daß ich mein Vaterland verraten darf, so ist dies eine Sophisterei.

三 論理的なものの三側面

——それと同様、私の行為に於て『私の主観的自由』は、これが若し、私が行為するところのものにあつては私は私の見識と確信をもっている、という意味であるならば、『私の主観的自由』は本質的原理である。然るに、**ひたすら**この原理からのみ推論するならば、それはなべて詭弁である、且つそれは人倫の一切の原則を放棄するものである。——弁証法はかかる振舞いとは本質的に違っている。何故なれば弁証法は、まさしく、事物を即自的且つ対自的に考察せんとする、然る場合偏頗^{へんぱ}な悟性諸規定が判明ⁱする。——且又弁証法は哲学に於て何ら新しいものではない。古代哲学の中ではプラトンが弁証法の発見者だと称せられている。而かもこのことは、プラトン哲学に於て弁証法ははじめて自由な科学的・従つて又同時に客観的形態をもつて出て来たという限りに於ては、正当である。ソクラテスにあつて弁証法的なるものは、彼の哲学的思索の一般的特性に合致してまだ主として、主観的な形態、即ち**アイロニイ**の形態を有している。ソクラテスは彼の弁証法を先ず普通の意識全般に向けた、それから特にソフィスト達に向けた。彼は談話するに當つて、話題となれる事柄^{つうぎょう}について、一層精しく通曉したいかの如く装うことを常とした。彼はかような遣り方で色々と質問を出した。そして、彼が対談している人々を、それらの人々に最初正しいと思われていたものの真反対の方へ導いて行つた。例えばソフィスト達が自分を教師だと呼んだ場合、ソクラテスは一聯の疑問をもつて、ソフィストのプロタゴラスをして『すべて習うことは想起である』ということⁱを自認せしめるように指し向けた。→

i 「分析的規定の有限性と一面性をあきらかにするのが弁証法なのだから。」

- Ebenso ist in meinem Handeln meine subjektive Freiheit in dem Sinn, daß bei dem, was ich thue, ich mit meiner Einsicht und Überzeugung bin, ein wesentliches Princip. Räsoniere ich aber aus diesem Princip allein, so ist dies gleichfalls Sophisterei und werden damit alle Grundsätze der Sittlichkeit über den Haufen geworfen. - Die Dialektik ist von solchem Tun wesentlich verschieden, denn diese geht gerade darauf aus, die Dinge an und für sich zu betrachten wobei sich sodann die Endlichkeit der einseitigen Verstandesbestimmungen. - Übrigens ist die Dialektik in der Philosophie nichts Neues. Unter den Alten wird Platon als der Erfinder der Dialektik genannt, und zwar insofern mit Recht, als in der Platonischen Philosophie die Dialektik zuerst in freier wissenschaftlicher und damit zugleich objektiver Form vorkommt. Bei Sokrates hat das Dialektische, in Übereinstimmung mit dem allgemeinen Charakter seines Philosophierens, noch eine vorherrschend subjektive Gestalt, nämlich die der Ironie. Sokrates richtete seine Dialektik einmal gegen das gewöhnliche Bewußtsein überhaupt und sodann insbesondere gegen die Sophisten. Bei seinen Unterredungen pflegte er dann den Schein anzunehmen, als wolle er sich näher über die Sache, von welcher die Rede war, unterrichten; er tat in dieser Beziehung allerhand Fragen und führte so die, mit denen er sich unterredete, auf das Entgegengesetzte von dem, was ihnen zunächst als das Richtige erschienen war. Wenn z. B. die Sophisten sich Lehrer nannten, so brachte Sokrates durch eine Reihe von Fragen den Sophisten Protagoras dahin, zugeben zu müssen, daß alles Lernen bloß Erinnerung sei.

三 論理的なものの三側面

——次に、プラトンは彼の厳密な学問的な対話の中で、弁証法的論述をもって一般にすべての固定的悟性諸規定の有限なることを示している。例えば、『パルメニデス』の中で一から多を繙き出し、それにも拘らず多は一として規定されるものであることを示している。プラトンはかかる高大たる仕方では弁証法を取扱った。——近世に於て、弁証法を再び想起せしめ、新にこれが真価を定めたものは、特にカントである。彼はこのことを（既述せる〔四十八節〕かの）理性の所謂二律背反の遂行によって成遂げている、二律背反に於ては理由づけに於ける単なる無定見や単に主観的行動が論ぜられるのではなく、寧ろあらゆる抽象的悟性規定は、それが実際そうあるが如くにのみ取られると、如何に直接にその真反対のものに転化するかを示すことが論ぜられている。——たとえ悟性が如何に弁証法に逆らいがちのものであっても、弁証法は決して単に哲学的意識のためにのみ存在するものと見るべきではない、むしろ今問題となっているところのものは一切のその他の意識の中に及び一般の経験の中にすでに見出される。吾々を取巻く一切のものが、弁証法的なるものの実例として観られることができる。吾々は、一切の有限的なものは一つの確固たるもの究極のものであるのではなくて、寧ろ^{へんえき}変易的暫有的であることを知っている、蓋しそれは有限的なものの弁証法に外ならない。弁証法によりて、有限的なものは、即自的にそれ自らの他者として、それが直接的である所以のものを超越して追い遣られ、そしてその真反対のものに変わるのである。→

- Platon zeigt dann in seinen strengen wissenschaftlichen Dialogen durch die dialektische Behandlung überhaupt die Endlichkeit aller festen Verstandesbestimmungen. So leitet er z. B. im Parmenides vom Einen das Viele ab und zeigt demungeachtet, wie das Viele nur dies ist, sich als das Eine zu bestimmen. In solcher großen Weise hat Platon die Dialektik behandelt. - In der neueren Zeit ist es vornehmlich Kant gewesen, der die Dialektik wieder in Erinnerung gebracht und dieselbe aufs neue in ihre Würde eingesetzt hat und zwar durch die bereits (§ 48) besprochene Durchführung der sogenannten Antinomien der Vernunft, bei denen es sich keineswegs um ein bloßes Hin- und Hergehen an Gründen und um ein bloß subjektives Tun, sondern vielmehr darum handelt, aufzuzeigen, wie eine jede abstrakte Verstandesbestimmung, nur so genommen, wie sie sich selbst gibt, unmittelbar in ihr Entgegengesetztes umschlägt. - Wie sehr nun auch der Verstand sich gegen die Dialektik zu sträuben pflegt, so ist dieselbe doch gleichwohl keineswegs als bloß für das philosophische Bewußtsein vorhanden zu betrachten, sondern es findet sich vielmehr dasjenige, um was es sich hierbei handelt, auch schon in allem sonstigen Bewußtsein und in der allgemeinen Erfahrung. Alles, was uns umgibt, kann als ein Beispiel des Dialektischen betrachtet werden. Wir wissen, daß alles Endliche, anstatt ein Festes und Letztes zu sein, vielmehr veränderlich und vergänglich ist, und dies ist nichts anderes als die Dialektik des Endlichen, wodurch dasselbe, als an sich das Andere seiner selbst, auch über das, was es unmittelbar ist, hinausgetrieben wird und in sein Entgegengesetztes umschlägt.

三 論理的なものの三側面

先きに（第八十節）、悟性は神の**善意**の表象の中に含まれているところのものとして見らるべきであると、言われたが、それと同じ（客観的）意味に於ての弁証法について、その原理は神の**威力**の表象に該応することが注意さるべきである。吾々は言う、『一切の事物（即ち有限なるものそのもの）は審判される』と、吾々はここに弁証法、実に、それが前には何者も、それが如何に恒常確實のものに見えようとも、拮抗^{あまね}することを得ざる普く不可抗の威力としての弁証法を直観する。この規定をもってしては、神の本質の深さ、神の概念はまだ尽されはしない。けれども弁証法はすべての宗教的意識に於ける本質的契機を構成する。――更に又弁証法は自然及び精神の世界のあらゆる個々の領域や形態の中で有力に働いている。例えば、諸天体の運動に於いて。一つの星が今この処にある、併し即自的に、この星はある他の処にもあるべきものである、そしてそれはかかる自らの他有を、それが動くことによって、存在にもたらす。と同様、自然界の諸元素も弁証法的なもののたることが知られる、氣象的過程はそれの弁証法の現象である。この同じ原理は、その他の一切の自然過程の基礎たるところのものである、そして同時に自然はこれによってそれ自らを超越せしめられる。精神界に於ける弁証法の存在に関しては、尚又進んで法律的及び人倫的領域に関しては、ここには唯、一般の経験上、如何に或る状態若しくは或る行為の極端はそれの真反対に変わりがちであるかを想い起されればいい、かかる場合の弁証法は色々ⁱと諺の中で承認されている。例えば『法も過ぐれば、不法を招く』ⁱとされているが、それは抽象的な法はそれの尖端に追い遣られ不法に変わることを言い表している。→

i 「最高の正義は最高の不正義」

Wenn früher (§ 80) gesagt wurde, der Verstand sei als dasjenige zu betrachten, was in der Vorstellung von der Güte Gottes enthalten ist, so ist nunmehr von der Dialektik in demselben (objektiven) Sinn zu bemerken, daß das Princip derselben der Vorstellung von der Macht Gottes entspricht. Wir sagen, daß alle Dinge (d. h. alles Endliche als solches) zu Gericht gehen, und haben hiermit die Anschauung der Dialektik als der allgemeinen unwiderstehlichen Macht, vor welcher nichts, wie sicher und fest dasselbe sich auch dünken möge, zu bestehen vermag. Mit dieser Bestimmung ist dann allerdings die Tiefe des göttlichen Wesens, der Begriff Gottes noch nicht erschöpft; wohl aber bildet dieselbe ein wesentliches Moment in allem religiösen Bewußtsein. - Weiter macht sich nun auch die Dialektik in allen besonderen Gebieten und Gestaltungen der natürlichen und der geistigen Welt geltend. So z. B. in der Bewegung der Himmelskörper. Ein Planet steht jetzt an diesem Ort, ist aber an sich, dies auch an einem anderen Ort zu sein, und bringt dies sein Anderssein zur Existenz dadurch, daß er sich bewegt. Ebenso erweisen sich die physikalischen Elemente als dialektisch, und der meteorologische Prozeß ist die Erscheinung ihrer Dialektik. Dasselbe Princip ist es, welches die Grundlage aller übrigen Naturprozesse bildet und wodurch zugleich die Natur über sich selbst hinausgetrieben wird. Was das Vorkommen der Dialektik in der geistigen Welt und näher auf dem Gebiet des Rechtlichen und Sittlichen anbetrifft, so braucht hier nur daran erinnert zu werden, wie, allgemeiner Erfahrung zufolge, das Äußerste eines Zustandes oder eines Tuns in sein Entgegengesetztes umzuschlagen pflegt, welche Dialektik dann auch vielfältig in Sprichwörtern ihre Anerkennung findet. So heißt es z. B.: *summum ius summa iniuria*, womit ausgesprochen ist, daß das abstrakte Recht, auf seine Spitze getrieben, in Unrecht umschlägt.

三 論理的なものの三側面

又、政治の方面で、無政府と専制主義との両端は如何に相互に誘致しがちであるかは、周知の如くである。個別的形骸に於ける人倫の領域中の弁証法の意識を、吾々はあの一般周知の諺『傲^{おご}るもの久しからず』——『鋭さも過ぐれば刃が欠ける』等々の中に見出す。——肉体及び精神上の感受も亦その弁証法を有つ。如何に悲喜両極端は互いに変わり合うかは、人の知るところである。喜びでもっていっぱい胸は涙でもって緩^{ゆる}げられ、喰い入る憂愁は事情によっては微笑でもって表現されがちである。

補遺二 懷疑論は単に疑惑論と見られてはならない、むしろ懷疑論はそれの事柄、即ち一切の有限なものの無意義を確信するものである。ただ疑っている者はまだ、彼の疑いは解かれ得るものであり、尚又彼がそのいずれを取るかに迷っているところの一方の或いは他方の規定的なもののいずれか一方が恒常且真実なものであることが知れるであろう、という希望を懷いている。これに反して本来の懷疑論は悟性の一切の確固さを完全に疑うことである、そしてそこに生ずる情感は確固不動と自己安住のそれである。これはかの高き古代懷疑論である、吾々はそれを特にセクスツス・エンピリクスに於て現れているのを見出す、尚又ストアやエピクロスの徒の独断的諸体系の補いとして後期ローマ時代に於て完成を得たる懷疑論の如きはそれである。この高い古代懷疑論と、既述せる（第三十九節）^{（注七）}近代の・或いは批判哲学に先んじ或いはこれから出て来た・懷疑論とは混同されてはならない、この懷疑論は超感官的なものの真理性と確実性を斥け、反之、感官的なもの及び直接的感覚に於て存するものを吾々の信賴すべきものと称することによってのみ成立している。——

注七 第三十九節では、かかる近代懷疑論としてヒュームのそれを挙げて、ここに述ぶところと同様に古代の懷疑論とを区別している。

Ebenso ist es bekannt, wie im Politischen die Extreme der Anarchie und des Despotismus einander gegenseitig herbeizuführen pflegen. Das Bewußtsein der Dialektik im Gebiet des Sittlichen in seiner individuellen Gestalt finden wir in jenen allbekannten Sprichwörtern: Hochmut kommt vor dem Fall, Allzuscharf macht schartig usw. - Auch die Empfindung, die leibliche sowohl als die geistige, hat ihre Dialektik. Es ist bekannt, wie die Extreme des Schmerzes und der Freude ineinander übergehen; das von Freude erfüllte Herz erleichtert sich in Tränen, und die innigste Wehmut pflegt unter Umständen sich durch Lächeln anzukündigen.

Zusatz 2. Der Skeptizismus darf nicht bloß als eine Zweifelslehre betrachtet werden, vielmehr ist derselbe seiner Sache, d. h. der Nichtigkeit alles Endlichen, schlechthin gewiß. Wer nur zweifelt, der steht noch in der Hoffnung, daß sein Zweifel gelöst werden könne und daß das eine oder das andere Bestimmte, wozwischen er hin und her schwankt, sich als ein Festes und Wahrhaftes ergeben werde. Dahingegen ist der eigentliche Skeptizismus die vollkommene Verzweiflung an allem Festen des Verstandes, und die sich daraus ergebende Gesinnung ist die der Unerschütterlichkeit und des Insichberuhens. Dies ist der hohe, antike Skeptizismus, wie wir ihn namentlich beim Sextus Empiricus dargestellt findet und wie derselbe als Komplement zu den dogmatischen Systemen der Stoiker und Epikureer in der späteren Römerzeit seine Ausbildung erhalten hat. Mit diesem hohen antiken Skeptizismus ist nicht jener bereits früher (§ 39) erwähnte moderne, teils der kritischen Philosophie voran-, teils aus dieser hervorgegangene Skeptizismus zu verwechseln, welcher bloß darin besteht, die Wahrheit und Gewißheit des Übersinnlichen zu leugnen und dagegen das Sinnliche und in der unmittelbaren Empfindung Vorhandene als dasjenige zu bezeichnen, woran wir uns zu halten haben.

三 論理的なものの三側面

ところが懷疑論は今日もなお屢々すべての実質的知識一般の、従って・それが実質的認識に関する限りで・哲学の一つの強敵と見られているが、これに対しては次のような留意を要する、実際に懷疑論を怖れざるを得ぬ且つこれに拮抗する力なきものは唯抽象的に悟性的なる思惟のみである。之に反して哲学は懷疑的なものを一つの契機として、即ち弁証法的なものとして自分の内に含んでいる。哲学はそうした場合弁証法の単に否定的なる成果に留ろうとしない、この点懷疑論と異なる。懷疑論はその成果を誤認している。というのは懷疑論は成果を単なる・換言すれば抽象的否定だと固執しているから。弁証法はその成果として否定的なものを持っているがしかし、この否定的なるものは、まさに成果として、同時に肯定的なものである。何故なれば否定的なものは、それがそこから成果し来れるところのものを、揚棄されたるものとして自分の中に含んでいるから、且又それなくしては存在しないから。これは併し論理的なものの第三形態、即ち**思弁的なもの**若しくは積極的理性的なるもの根本規定である。〔第八十一節〕

四

(C) **思弁的なもの**若しくは**積極的理性的なもの**は、対立をなせる諸規定の統一を把握する、即ち諸規定の解消と移行作用の中に含まれている**肯定的たるもの**を把握する。

(1) 弁証法はある**積極的**成果をもっている、何故なれば弁証法は**一定の内容**をもっているから、若しくはその成果は**空虚にして抽象的な無**ではなくてとにかく**或る諸規定**の否定であるから、そしてその諸規定は成果の中に含まれてあるが、かく含まれてあるは、この成果が**直接的無**ではなく、成果であるが故である。(2) この理性的なるものはそれ故に、思惟されたものであり且つ抽象的なものではあるけれども、同時に**具体的**なるものである、というのは理性的なるものは、**単純なる形式的なる統一**ではなくて、**区別された諸規定の統一態**なのだから。→

Wenn übrigens der Skeptizismus noch heutzutage häufig als ein unwiderstehlicher Feind alles positiven Wissens überhaupt und somit auch der Philosophie, insofern es bei dieser um positive Erkenntnis zu tun ist, betrachtet wird, so ist dagegen zu bemerken, daß es in der Tat bloß das endliche, abstrakt verständige Denken ist, welches den Skeptizismus zu fürchten hat und demselben nicht zu widerstehen vermag, wohingegen die Philosophie das Skeptische als ein Moment in sich enthält, nämlich als das Dialektische. Die Philosophie bleibt dann aber bei dem bloß negativen Resultat der Dialektik nicht stehen, wie dies mit dem Skeptizismus der Fall ist. Dieser erkennt sein Resultat, indem er dasselbe als bloße, d. h. als abstrakte Negation festhält. Indem die Dialektik zu ihrem Resultat das Negative hat, so ist dieses, eben als Resultat, zugleich das Positive, denn es enthält dasjenige, woraus es resultiert, als aufgehoben in sich und ist nicht ohne dasselbe. Die aber ist die Grundbestimmung der dritten Form des Logischen, nämlich des Spekultativen oder Positiv-Vernünftigen.

§ 82

γ) Das Spekulative oder Positiv-Vernünftige faßt die Einheit der Bestimmungen in ihrer Entgegensetzung auf, das Affirmative, das in ihrer Auflösung und ihrem Übergehen enthalten ist.

1. Die Dialektik hat ein positives Resultat, weil sie einen bestimmten Inhalt hat oder weil ihr Resultat wahrhaft nicht das leere, abstrakte Nichts, sondern die Negation von gewissen Bestimmungen ist, welche im Resultate eben deswegen enthalten sind, weil dies nicht ein unmittelbares Nichts, sondern ein Resultat ist.

2. Dies Vernünftige ist daher, obwohl ein Gedachtes, auch Abstraktes, zugleich ein Konkretes, weil es nicht einfache, formelle Einheit, sondern Einheit unterschiedener Bestimmungen ist.

三 論理的なものの三側面

それ故に一般に哲学は単なる諸抽象若しくは形式的なる思想を決して取扱ってはならぬのであって、ただ具体的思想をのみ取扱わねばならぬ。(3) 単なる**悟性＝論理学**は思弁的論理学の中に含まれていて、これから直ちにつくられ得るのである。つくられるには、そこから弁証法的なるもの及び理性的なるものを取り去ることより外何ものをも要しない。かくして、単なる悟性＝論理学は**なみ普通の論理学**すなわち、その有限性に於て無限なる或るものとして妥当するところの多様に寄せ集められた思想諸規定の或る**記述書**となる。

補遺 理性的なるものはその**内容**上単に哲学の所有物であるどころではなく、むしろそれは一切の人間に、教養及び精神的発達の何れの段階にあらうとも、存在すると言わねばならない、この意味に於て人は昔から正当にも人間を一つの理性的存在と呼びならして来たのだ。理性的なものに就いて知る経験的に一般的な仕方は、先ず先入見及び前提のそれである、そして理性的なものの特性は、先きの説明に倣って(第四十五節)^(注八)、一般に、ひとつの無制約的なもの・且つ従って自分の規定性を自分自身のうちに含むもの・であるという特性である。この意味に於て人は、彼が神に就いて知り且つこれを全く自分自身によって規定されたものとして知る限りに於て、何物よりも先きに理性的なものに就いて知っているのだ。同様に更に彼れの祖国及びその法規に就いての一市民の知識は、如上のものが彼にとって自分の個人的意志を屈服せしめねばならぬような一つの無制約的なもの且つ同時に一般的なものとして値いするなら、その限りに於て理性的なものの一つの知識である。且つ同じ意味に於て既に子供の知識及び意志すらも、それが両親の意志を知り且つこれを意志する場合には、理性的である。

注八 第四十五節でヘーゲルは理性について次の如くに述べている。――経験的認識なるものは或る特定の内容の認識であるから、特殊的でない従って限定されないようなもの(それはここでは無制約者若しくは無限なるものである。なお換言すれば、思惟に於ける自我の根源的同一性である)を対象とすることができない。反之、理性はこの如き純粹同一性を自ら対象若しくは目的とする思惟の謂いである。

Mit bloßen Abstraktionen oder formellen Gedanken hat es darum überhaupt die Philosophie ganz und gar nicht zu tun, sondern allein mit konkreten Gedanken. 3. In der spekulativen Logik ist die bloße Verstandes-Logik enthalten und kann aus jener sogleich gemacht werden; es bedarf dazu nichts, als daraus das Dialektische und Vernünftige wegzulassen; so wird sie zu dem, was die gewöhnliche Logik ist, eine Historie von mancherlei zusammengestellten Gedankenbestimmungen, die in ihrer Endlichkeit als etwas Unendliches gelten.

Zusatz. Seinem Inhalt nach ist das Vernünftige so wenig bloß Eigentum der Philosophie, daß vielmehr gesagt werden muß, dasselbe sei für alle Menschen vorhanden, auf welcher Stufe der Bildung und der geistigen Entwicklung sie sich auch befinden mögen, in welchem Sinn man mit Recht den Menschen von alters her als ein vernünftiges Wesen bezeichnet hat. Die empirisch allgemeine Weise, vom Vernünftigen zu wissen, ist zunächst die des Vorurteils und der Voraussetzung, und der Charakter des Vernünftigen ist, früherer Erörterung zufolge (§ 45), überhaupt der, ein Unbedingtes und somit seine Bestimmtheit in sich selbst Enthaltendes zu sein. In diesem Sinn weiß vor allen Dingen der Mensch vom Vernünftigen, insofern er von Gott und diesen als den schlechthin durch sich selbst Bestimmten weiß. Ebenso ist dann ferner das Wissen eines Bürgers von seinem Vaterland und dessen Gesetzen insofern ein Wissen von Vernünftigem, als ihm diese als ein Unbedingtes und zugleich als ein Allgemeines gelten, dem er sich mit seinem individuellen Willen zu unterwerfen hat, und in demselben Sinn ist selbst schon das Wissen und Wollen des Kindes vernünftig, indem dasselbe den Willen seiner Eltern weiß und diesen will.

三 論理的なものの三側面

さて更に、**思弁的なもの**は、それが**思惟せられる**限りに於て、理性的なもの（而も積極的に理性的なもの）以外の何ものでもない・日常生活に於ては、**思弁**【Spekulation 思惑・投機】なる表言は甚だ曖昧な且つ第二義的な意味に用いられるを常とする。例えば、結婚投機〔思弁〕若しくは商業投機〔思弁〕に就て語られる場合に次のようなこと丈が理解される、即ち直接そこに存在するもの以上に出べきものであるということ、他方、かかる投機〔思弁〕の内容を構成するところのものは差しあたりただ主観的なものであるが、それだけに留まるものでなくて、実現せらるべき若しくは客観性に移さるべきであるということ。

思弁【Spekulation 思惑・投機】に関するかくの如き通俗の言葉使いに就いては、先きに理念について注意したと同様のことが当て^{はま}る、それに尚ここでは次のような注意が附け加わる、というのは学者の中に数えられるような人々によってさえも、屢々思弁的なものについて明らかに単に主観的なものという意味で語られるということ、即ち自然及び精神上の事情や関係の解釈が、若し思弁的になされると、大層綺麗でもあり公平でもあるけれども経験はこれに一致しない、かかるものは現実にあつては許容され得ぬものである、と言った風に。これに対してはこう云うべきである、思弁的なものはその真義よりすれば、差し当つても決定的にも単に主観的なものではない、寧ろ、悟性が固執するところの対立を（従つて主観的なものと客観的なものの対立をも）揚棄せられたものとして自分の内に含み、まさに是がために具体的なものとして且つ総体性としてあらわれるところのものであると。→

Weiter ist nun das Spekulative überhaupt nichts anderes als das Vernünftige (und zwar das Positiv-Vernünftige), insofern dasselbe gedacht wird. Im gemeinen Leben pflegt der Ausdruck Spekulation in einem sehr vagen und zugleich untergeordneten Sinn gebraucht zu werden, so z. B., wenn von Heirats- oder Handelsspekulationen die Rede ist, worunter dann nur so viel verstanden wird, einerseits daß über das unmittelbar Vorhandene hinausgegangen werden soll und andererseits daß dasjenige, was den Inhalt solch Spekulationen bildet, zunächst nur ein Subjektives ist, jedoch nicht ein solches bleiben, sondern realisiert oder in Objektivität übersetzt werden soll.

Es gilt von diesem gemeinen Sprachgebrauch hinsichtlich der Spekulationen dasselbe, was früher von der Idee bemerkt wurde, woran sich dann noch die weitere Bemerkung schließt, daß vielfältig von solchen, die sich schon zu den Gebildeteren rechnen, von der Spekulation auch ausdrücklich in der Bedeutung eines bloß Subjektiven gesprochen wird, in der Art nämlich, daß es heißt, eine gewisse Auffassung natürlicher oder geistiger Zustände und Verhältnisse möge zwar, bloß spekulativ genommen, sehr schön und richtig sein, allein die Erfahrung stimme damit nicht überein, und in der Wirklichkeit könne dergleichen nicht zugelassen werden. Dagegen ist dann zu sagen, daß das Spekulative seiner wahren Bedeutung nach weder vorläufig noch auch definitiv ein bloß Subjektives ist, sondern vielmehr ausdrücklich dasjenige, welches jene Gegensätze, bei denen der Verstand stehenbleibt (somit auch den des Subjektiven und Objektiven), als aufgehoben in sich enthält und eben damit sich als konkret und als Totalität erweist.

三 論理的なものの三側面

それ故、思弁的内容は一つの一面的な命題でもって言い表されることが出来ない。例えば「絶対者は主観的なものと客観的なものの統一である」と吾々が言うとき、これは勿論正しい、けれどもその場合**統一**のみが言われ、ためにこれが強調されると、この命題は片寄っている、何故というに実際は主観的なものと客観的なものが同一であるのみならず、区別されているのだから。――

思弁の意義に関して茲に尚述べねばならぬことは、人は思弁なる言葉のもとに、以前に・特に宗教的意識及びその内容への関係に於て・**神秘的なるもの**と呼ばれるを常としたところのものと同じものを理解せねばならぬということである。若し今日に於て神秘的なものについて語られるならば、このものは通常秘密に充ちたもの及び理解されないものと同意義に通用する、そしてこの秘密に充ちたもの及び理解されないものは、教養と考え方とのとかくの相異に従って、一方の人々からは本来のもの且つ真実のものと見做され、他方の人々からは併し、迷信と欺瞞に属するものと見做される。以上に関しては次のことを注意せねばならぬ、神秘的なるものは確かに一つの秘密に充ちたものであるが、しかし唯だ悟性にとってのみそうであるのであって、しかもそのわけは、抽象的同一性が悟性の原理であって、神秘的なるものは併し（思弁的なものと同意義のものとして）、悟性にとっては唯だその分離と対立に於てのみ真なるものとして値いする如き・諸規定の具体的統一である、という単純な理由によってである。→

Ein spekulativer Inhalt kann deshalb auch nicht in einem einseitigen Satz ausgesprochen werden. Sagen wir z. B., das Absolute sei die Einheit des Subjektiven und des Objektiven, so ist dies zwar richtig, jedoch insofern einseitig, als hier nur die Einheit ausgesprochen und auf diese der Akzent gelegt wird, während doch in der Tat das Subjektive und das Objektive nicht nur identisch, sondern auch unterschieden sind.

Hinsichtlich der Bedeutung des Spekultativen ist hier noch zu erwähnen, daß man darunter dasselbe zu verstehen hat, was früher, zumal in Beziehung auf das religiöse Bewußtsein und dessen Inhalt, als das Mystische bezeichnet zu werden pflegte. Wenn heutzutage vom Mystischen die Rede ist, so gilt dies in der Regel als gleichbedeutend mit dem Geheimnisvollen und Unbegreiflichen, und dies Geheimnisvolle und Unbegreifliche wird dann, je nach Verschiedenheit der sonstigen Bildung und Sinnesweise, von den einen als das Eigentliche und Wahrhafte, von den anderen aber als das dem Aberglauben und der Täuschung Angehörige betrachtet. Hierüber ist zunächst zu bemerken, daß das Mystische allerdings ein Geheimnisvolles ist, jedoch nur für den Verstand, und zwar einfach um deswillen, weil die abstrakte Identität das Prinzip des Verstandes, das Mystische aber (als gleichbedeutend mit dem Spekultativen) die konkrete Einheit derjenigen Bestimmungen ist, welche dem Verstand nur in ihrer Trennung und Entgegensetzung für wahr gelten.

三 論理的なものの三側面

ところが若し神秘的なものを真実と認める人々がその際また、それを全然秘密なものであるというように考えて満足するならば、そうすることによって彼等にあつては唯だ次のことが表現せられるのみである、すなわち思惟は彼等にとってはなべて抽象的な同一的定立の意義しか持たず、従つて真理に到達せんがためにはひととは思惟を断念しなければならぬ、或いは通常よく言われるように、理性を**し****ばり**附けておかねばならぬ、ということ。さて併しながら吾々が既に見たように、抽象的悟性的な思惟は確固たるもの且つ窮極的なものであるどころではなく、それはむしろ自己自身の絶えざる揚棄として且つその対立物への顛倒^{てんとう}として自らを示すものであり、之に反して理性的なものそのものはまさしく、諸対立物を観念的契機として自分の内に含む、ということに於て成立つ。一切の理性的なものは従つて神秘的と呼ばれることができる、その場合併しながら唯これ丈のこと、すなわち理性的なものは悟性を超越するということが言われるのみであつて。決して理性的なものが一般に思惟にとって不可入且つ、不可解と見做さるべきであるということではない。〔第八十二節〕

【第八十三節：論理学は三部門に分かれる。一存在論、二本質論、三概念と理念論。思考のあり方からすると、一直接的思考、二反省的・媒介的思考、三自分に還帰する思考。云々】

Wenn dann diejenigen, welche das Mystische als das Wahrhafte anerkennen, es gleichfalls dabei bewenden lassen, daß dasselbe ein schlechthin Geheimnisvolles sei, so wird damit ihrerseits nur ausgesprochen, daß das Denken für sie gleichfalls nur die Bedeutung des abstrakten Identischsetzens hat und daß man um deswillen, um zur Wahrheit zu gelangen, auf das Denken verzichten oder, wie auch gesagt zu werden pflegt, daß man die Vernunft gefangen nehmen müsse. Nun aber ist, wie wir gesehen haben, das abstrakt verständige Denken so wenig ein Festes und Letztes, daß dasselbe sich vielmehr als das beständige Aufheben seiner selbst und als das Umschlagen in sein Entgegengesetztes erweist, wohingegen das Vernünftige als solches gerade darin besteht, die Entgegengesetzten als ideelle Momente in sich zu enthalten. Alles Vernünftige ist somit zugleich als mystisch zu bezeichnen, womit jedoch nur so viel gesagt ist, daß dasselbe über den Verstand hinausgeht, und keineswegs, daß dasselbe überhaupt als dem Denken unzugänglich und unbegreiflich zu betrachten sei.

四 純粹有の弁証法

エンチクロペディー（第一、二、三版）第一編としての『論理の科学』（目次三の解題を参照）は有論・本質論・概念論の三部より成る。この中有論は純粹有をもって展開し始められる。有をもって始まる論理的理念の発展は、ヘーゲルも注意せる如く、これが理解は困難である。ここに抄訳せる論文は純粹有を語る節に属する補遺第二の全文である。ここに企てられている純粹有の哲学史的考察には弁証法の理解に助け多きものがある。題名も、この関心より、編者の附せるものである。

【八十六節補遺二】

吾々は論理的理念の種々なる段階を哲学の歴史の中に見出す、そのいずれもが絶対的なものの特殊の定義をその根底に持っているところの・相継いで現れた・諸哲学体系の形態に於ける哲学史の中に見出す。さて、論理的理念の展開は抽象から具体への進行である如く、哲学史に於ても最も初めの体系は最も抽象的であり、従って同時に最も貧困である。けれども先行の哲学体系の後のそれへの関係は、論理的理念の先行の段階の後のそれへの関係と、一般的に同一であって、而も後のものは先行のものを揚棄されたるものとして自分の内に含む底のものである、これが、哲学史に於て起ったそして屢々誤解されたる・一つの哲学体系の他の哲学体系によつての反駁の意義である。より適切には先行のものの後のものによつての反駁の意義である。或る哲学が反駁されるというと、動もすれば抽象的に否定的な意味に解せられる、すなわち反駁せられた哲学は一般にもはや妥当せぬという様に、片づけられ放棄されたかの様に。若しそうででもあろうなら、哲学史研究は全く荒涼たる仕事だと思なされねばならぬだろう、何故というに、この研究は時代の過ぎ行くと共に出来たすべての哲学体系が如何ようにその反駁を見出したかを、教えるものなのだから。→

„Encyklopädie“

Erster Theil. *Die Wissenschaft der Logik*

Erster Abtheilung. *Die Lehre vom Sein.*

A. *Die Qualität.*

a. *Sein*

§86

Zusatz 2. Die verschiedenen Stufen der logischen Idee finden wir in der Geschichte der Philosophie in der Gestalt nacheinander hervorgetretener philosophischer Systeme, deren jedes eine besondere Definition des Absoluten zu seiner Grundlage hat. So wie nun die Entfaltung der logischen Idee sich als ein Fortgang vom Abstrakten zum Konkreten erweist, ebenso sind dann auch in der Geschichte der Philosophie die frühesten Systeme die abstraktesten und damit zugleich die ärmsten. Das Verhältnis aber der früheren zu den späteren philosophischen Systemen ist im allgemeinen dasselbe wie das Verhältnis der früheren zu den späteren Stufen der logischen Idee, und zwar von der Art, daß die früheren die späteren als aufgehoben in sich enthalten. Dies ist die wahre Bedeutung der in der Geschichte der Philosophie vorkommenden und so oft mißverstandenen Widerlegung des einen philosophischen Systems durch ein anderes, und näher des früheren durch die späteren. Wenn vom Widerlegen einer Philosophie die Rede ist, so pflegt dies zunächst nur im abstrakt negativen Sinn genommen zu werden, dergestalt, daß die widerlegte Philosophie überhaupt nicht mehr gilt, daß dieselbe beseitigt und abgetan ist. Wenn dem so wäre, so müßte das Studium der Geschichte der Philosophie als ein durchaus trauriges Geschäft betrachtet werden, da dieses Studium lehrt, wie alle im Verlauf der Zeit hervorgetretenen philosophischen Systeme ihre Widerlegung gefunden haben.

四 純粹有の弁証法

しかし、すべての哲学が反駁されて来たということが認められる、と共に如何なる哲学も反駁されてはいない、尚又反駁されることは出来ないことが、主張されねばならぬ。ここに主張せられた後の事実は、二重の關係に於てそうである。哲学の名に価するどの哲学も理念一般をその内容とするものと見らるべきことがその一つ。どの哲学体系も理念の發展過程に於ける特殊の契機若しくは特殊の段階の表現として見らるべきことがその二つ。それ故、或る哲学の反駁は唯だ、その哲学の限界が乗り越えられること、その一定の原理が**ある**観念的契機に低下せしめられること、そういう意味を有するに過ぎない。哲学史は、その本質的内容よりして、過ぎ去れるものを取扱うのではなく、永遠なるもの且つ真に現在的なものを取扱わねばならない。哲学史は、その成果に於て人間的精神の錯迷のギャラリーに比すべきではなくて、寧ろ神々の**すがた**のパンテオンに比すべきである。謂うところの神々の**すがた**とは、弁証法的發展をなしつつ相継いであらわれた理念の種々なる段階である。さて、哲学史に於て起れる哲学の内容の發展が、一方ではどの位に純粹に論理的なる理念の弁証法的展開と一致するか、他方ではどの位それと外れるかを精細に指示することは、哲学史に委されているのであるが、此処では何よりも先ず次のことが叙べらるべきである、論理学の始めは哲学の本来の歴史の始めと同じであること。吾々はこの始めをエレア哲学の中に、精密に言えば、絶対的なものを**有**として把握するパルメニデスの哲学の中に見出す。パルメニデスは言う、『**有**があるのみである、而して無はない。』これは哲学の本来の始めとして見らるべきものである。何故というに、哲学は一般に思惟する認識である、然るにパルメニデスに於て初めて純粹思惟が確定せられ且つそれ自身対象とせられるに至ったから。

Nun aber muß, ebenso gut als zuzugeben ist, daß alle Philosophie widerlegt worden sind, zugleich auch behauptet werden, daß keine Philosophie widerlegt worden ist noch auch widerlegt zu werden vermag. Letzteres ist in der gedoppelten Beziehung der Fall, als einmal eine jede Philosophie, welche diesen Namen verdient, die Idee überhaupt zu ihrem Inhalt hat und als zweitens ein jedes philosophisches System als die Darstellung eines besonderen Momentes oder einer besonderen Stufe im Entwicklungsprozeß der Idee zu betrachten ist. Das Widerlegen einer Philosophie hat also nur den Sinn, daß deren Schranke überschritten und daß das bestimmte Prinzip derselben zu einem ideellen Moment herabgesetzt wird. Die Geschichte der Philosophie hat es somit ihrem wesentlichen Inhalt nach nicht mit Vergangenen, sondern mit Ewigem und schlechthin Gegenwärtigem zu tun und ist in ihrem Resultat nicht einer Galerie von Verirrungen des menschlichen Geistes, sondern vielmehr einem Pantheon von Göttergestalten zu vergleichen. Diese Göttergestalten aber sind die verschiedenen Stufen der Idee, wie solche in dialektischer Entwicklung nacheinander hervortreten. Während es nun der Geschichte der Philosophie überlassen bleibt, näher nachzuweisen, inwiefern die in derselben stattfindende Entfaltung ihres Inhalts mit der dialektischen Entfaltung der reinen logischen Idee einerseits übereinstimmt und andererseits von derselben abweicht, so ist hier zunächst nur zu erwähnen, daß der Anfang der Logik derselbe ist wie der Anfang der eigentlichen Geschichte der Philosophie. Diesen Anfang finden wir in der eleatischen und näher in der Philosophie des Parmenides, welcher das Absolute als das Sein auffaßt, indem er sagt: "das Sein nur ist, und das Nichts ist nicht". Es ist dies um deswillen als der eigentliche Anfang der Philosophie zu betrachten, weil die Philosophie überhaupt denkendes Erkennen, hier aber zuerst das reine Denken festgehalten und sich selbst gegenständlich geworden ist.

四 純粹有の弁証法

もとより人間は始めから思惟した、何故なれば人間は思惟によってのみ動物から区別されるのだから。しかし思惟をその純粹性に於て把え、同時にこれを全く客観的なものとして把えるに至るには、長い年月を必要とした。エレアの哲学者達は勇敢なる思惟者として顕著である。しかし、この抽象的な驚嘆には屢々次の如き評論が混じる。曰く、これらの哲学者がただ単に有を真なるものと認め、そして他に尚吾々の意識の対象を構成するすべてのものに真理を認めないから、これらの哲学者は余りに行き過ぎている、と。さて、単なる有に終始すべきものでないということは、勿論正当である、併しながら、吾々の意識の余の内容を謂わば有と**並んで**及び有の**外**にあるものとして、若しくはかかる内容を、単に、**も亦**有るところのものとして見るということは、無思想というべきである。その反対に、かかるものとしての有は確固たるもの究極なものではなく、寧ろ弁証法的にその反対物——なべて、直接的に取られると、**無**たるところのもの——に変わるということが、真事の事情である。故に、有は第一の純粹なる思想であること、尚、その他如何なるものをもって**始め**が作られようと（例えば自我即自我をもって、絶対的無差別者をもって、若しくは神そのものをもって、）有以外のこれらのものは差当たりただ表象されたものであつて、思惟されたものではないこと、尚又、思惟されるものはその思惟内容よりすればまさしくただ有であること、以上のことは確定される。

Gedacht haben zwar die Menschen von Anfang an, denn nur durch das Denken unterscheiden sie sich von den Tieren; allein es haben Jahrtausende dazu gehört, bevor es dazu gekommen ist, das Denken in seiner Reinheit und dasselbe zugleich als das schlechthin Objektive zu erfassen. Die Eleaten sind berühmt als kühne Denker; zu dieser abstrakten Bewunderung gesellt sich dann aber häufig die Bemerkung, diese Philosophen seien doch zu weit gegangen, indem dieselben bloß das Sein als das Wahre anerkannt und allem, was sonst noch den Gegenstand unseres Bewußtseins bildet, die Wahrheit abgesprochen. Nun ist es zwar ganz richtig, daß beim bloßen Sein nicht stehengeblieben werden darf; allein es ist gedankenlos, den sonstigen Inhalt unseres Bewußtseins als gleichsam neben und außer dem Sein befindlich oder als etwas zu betrachten, was es nur auch gibt. Das wahre Verhältnis ist dagegen dieses, daß das Sein als solches nicht ein Festes und Letztes, sondern vielmehr als dialektisch in sein Entgegengesetztes umschlägt, welches, gleichfalls unmittelbar genommen, das Nichts ist. Es bleibt somit dabei, daß das Sein der erste reine Gedanke ist und daß, womit auch sonst der Anfang gemacht werden mag (mit dem Ich = Ich, mit der absoluten Indifferenz oder mit Gott selbst), dies Sonstige zunächst nur ein Vorgestelltes und nicht ein Gedachtes, und daß dasselbe seinem Gedankeninhalt nach eben nur das Sein ist.

五 質と量及びその転化

この論文はエンチクロペディー（第二版）の第一編『論理の科学』（目次三の解題を参照）の第一部『有論』、更にその中の一章『度合』の全訳である。

一 〔第百七節〕

度合【Maß 度量・限度】とは質的定量^{（注九）}、差当り**直接的なもの**としてのものである。即ち定有若しくはある質の結びつける定量である。

補遺 質と量の統一としての度合は、かくて同時に完成せる有である。吾々が有を云^{うんい}為するとき、有は何よりも先ず全く抽象的で無規定的なものとして現れる。ところが有は本質的には自己自身を規定することである、そして有がその完成的規定性に達するのは度合に於てである。人はまた度合を絶対的なものの定義として見ることができる、それによると『神は一切の事物の度合である』と言われている。この直観は多くの古代ヘブライの頌歌の基調をなしている、そこでは神の讃美はつまり、神は一切の物、海と陸に、河と山に、尚又種々なる植物と動物に、それらの限界を定めるものであるということになっている。——吾々は希臘人の宗教的意識の中に、度合の神格性が人倫的なものと緊密に関係されてネメシス^{（注十）}として表象せられているのを見出す。→

注九 ヘーゲルの論理学の第一部は、質・量・度合の三つに分れている。質といい量といい孤立しては抽象的であって、具体的なものにあっては見出されぬ。質及び量の真理性はそこにはまだ出ていない。この真理性が度合である。ヘーゲルは量についての理説の終りで言う『質的規定と量的規定はまだ互に外的である。ところがその真理性、即ち量なるものそのものはその外的性に於ける自分との関係であることよりすれば、それは度合である。』而して定量とは、量に外ならぬが、本質的にとられた量の謂である。

注十 希臘語動詞 Nemein は分配するの意。名詞 Nemesis は平衡的分配の義。これが神秘化せられてネメシス【因果応報の女神】と呼ばれる。

„Encyklopädie“

Erster Theil. *Die Wissenschaft der Logik*

Erster Abtheilung. *Die Lehre vom Sein.*

C. *Das Maß*ⁱ

§ 107

Das Maß ist das qualitative Quantum, zunächst als unmittelbares, ein Quantum, an welches ein Dasein oder eine Qualität gebunden ist.

Zusatz. Das Maß als die Einheit der Qualität und der Quantität ist hiermit zugleich das vollendete Sein. Wenn wir vom Sein sprechen, so erscheint dasselbe zunächst als das ganz Abstrakte und Bestimmungslose; nun aber ist das Sein wesentlich dies, sich selbst zu bestimmen, und seine vollendete Bestimmtheit erreicht dasselbe im Maß. Man kann das Maß auch als eine Definition des Absoluten betrachten, und es ist demgemäß gesagt worden, Gott sei das Maß aller Dinge. Diese Anschauung ist es denn auch, welche den Grundton mancher althebräischen Gesänge bildet, in welchen die Verherrlichung Gottes im wesentlichen darauf hinausläuft, daß er es sei, welcher allem seine Grenze gesetzt, dem Meer und dem festen Lande, den Flüssen und den Bergen und ebenso den verschiedenen Arten von Pflanzen und von Tieren. - Im religiösen Bewußtsein der Griechen finden wir die Göttlichkeit des Maßes in näherer Beziehung auf das Sittliche als Nemesis vorgestellt.

i 底本では "Maaß" が使われているが、以下は „Maß“ とする。

五 質と量及び其転化

この表象には、一切の人間的なもの——富・名誉・権力・及び喜び・悲しみ【等】々——はその一定の度合を持って、そしてこの度合を外れることは衰滅と没落を来すということが一般に含まれている。——さて更に進んで対象の世界に於ける度合の存在に関しては、吾々は先ず自然界の中に、度合がその本質的内容を構成している存在物を見出す。殊に太陽系がそうである、太陽系を吾々は一般に自由度合の世界として観察せねばならぬ。次に更に無機的自然界に於ての観察を進めてみると、現存の質的並に量的規定が互に無頓着なものとしてあらわれる限り、此処では度合が謂わば背景にかくれる。例えば岩や**流れ**の質は或る一定の量に結び付けられていない。併しもっと精細に考察すると、上述の諸対象でも決して全然没度合的ではないことを発見する、何故なれば**流れ**の水や、岩の個々の成分は、化学的探索に於ては、それらの中に含まれている質料の量的関係によって制約されている質たることがわかる。併し、度合は更に有機的世界に於ては一層判然と直接的直観に映じて現れる。種々なる種類の植物や動物は全体に於ても個々の部分に於ても或る一定の度合を持っている、この際尚注意すべきは、無機的自然により近接せる、より不完全な有機的諸形像は一層高等のそれから一面その度合のより著しい不確定性によって区別されるという事情である。例えば吾々は化石の中に、顕微鏡でもって認められる所の、と同時に他のものは車輪大に迄達する所の所謂菊石ⁱを見出す。度合のこの如き不確定性は、有機的形成の低い段階にある多くの植物に於ても見られる。例えば羊齒^{しだ}の類に於けるが如き。

i アンモナイト

In dieser Vorstellung liegt dann überhaupt, daß alles Menschliche - Reichtum, Ehre, Macht und ebenso Freude, Schmerz usw. - sein bestimmtes Maß hat, dessen Überschreitung zum Verderben und zum Untergang führt. - Was nunmehr weiter das Vorkommen des Maßes in der gegenständlichen Welt anbetrifft, so finden wir zunächst in der Natur solche Existenzen, deren wesentlichen Inhalt das Maß bildet. Dies ist namentlich der Fall mit dem Sonnensystem, welches wir überhaupt als das Reich der freien Maße zu betrachten haben. Schreiten wir dann weiter vor in der Betrachtung der unorganischen Natur, so tritt hier das Maß insofern gleichsam in den Hintergrund, als hier vielfältig die vorhandenen qualitativen und quantitativen Bestimmungen sich als gleichgültig gegeneinander erweisen. So ist z. B. die Qualität eines Felsen oder eines Flusses nicht an eine bestimmte Größe gebunden. Bei näherer Betrachtung finden wir indes, daß auch Gegenstände wie die genannten nicht schlechthin maßlos sind, denn das Wasser in einem Fluß und die einzelnen Bestandteile eines Felsen erweisen sich bei der chemischen Untersuchung wieder als Qualitäten, die durch quantitative Verhältnisse der in denselben enthaltenen Stoffe bedingt sind. Entschiedener in die unmittelbare Anschauung fallend tritt dann aber das Maß wieder in der organischen Natur hervor. Die verschiedenen Gattungen der Pflanzen und Tiere haben sowohl im Ganzen als auch in ihren einzelnen Teilen ein gewisses Maß, wobei noch der Umstand zu bemerken ist, daß die unvollkommenen, der unorganischen Natur näherstehenden organischen Gebilde sich von den höheren zum Teil durch die größere Unbestimmtheit ihres Maßes unterscheiden. So finden wir z. B. unter den Petrefakten sogenannte Ammonshörner, die nur durch das Mikroskop zu erkennen sind, und andere bis zur Größe eines Wagenrades. Dieselbe Unbestimmtheit des Maßes zeigt sich auch bei manchen Pflanzen, die auf einer niederen Stufe der organischen Ausbildung stehen, wie dies z. B. bei den Farnkräutern der Fall ist.

五 質と量及び其転化

二 〔第百八節〕

度合に於て質と量とか**直接的統一**に於てある限り、質と量との区別は同様に直接的な仕方では量と質とに於て現れる。然る限り一方では特殊の定量^(注十一)は単なる定量でありそして定在は増大をも減少をも容れることができ、而もそのために、この場合ひとつの**準則**に過ぎないところの、度合は揚棄されることはない。ところが他方定量の変化は又質の変化でもある訳けである。

補遺 度合中に存する質と量の同一性はただやっと**即自的**であつて、まだ併し**定立**されていない。だからこういうことになる、その統一がつまり度合たるところのこの両規定は、夫々自立的に妥当している、即ち一方では定在の量的諸規定が変えられることができ、而もそのためにその質が変化を受けるということはない、併し他方ではこの無頓着な増大と減少がその限界を有し、これを越えると質が変化を来すという様に、例えば水の温度は先ず差当りその液状的流動性に関して無頓着である。併しやがて、液状的に流動する水の温度の増減には、この凝集状態が質的に変りそして水は一方では水蒸気に、他方には氷に変わるという点があらわれる。或る量的変化がある場合、これは初めは全く無拘束なものの如くに見える、併しその背後にはすでに或る他のものがひそんでいる、そしてかような見かけ上無拘束な量的変化は謂わば、質的なものを撃つ計略である。希臘人はここに見られる度合のアンチノミーを既に色々な事物にことよせて直観化した。→

注十一 ヘーゲルが定量に下した説明をあげて置こう、量の直接的單純性にあつては、一 (eins) の否定的なものはそれ故に限界である、かくて量は本質的に定量である。

§ 108

Insofern im Maß Qualität und Quantität nur in unmittelbarer Einheit sind, so tritt ihr Unterschied auf eine ebenso unmittelbare Weise an ihnen hervor. Das spezifische Quantum ist insofern teils bloßes Quantum, und das Dasein in einer Vermehrung und Verminderung fähig, ohne daß das Maß, welches insofern eine Regel ist, dadurch aufgehoben wird, teils aber ist die Veränderung des Quantums auch eine Veränderung der Qualität.

Zusatz. Die im Maß vorhandene Identität der Qualität und der Quantität ist nur erst an sich, aber noch nicht gesetzt. Hierin liegt, daß diese beiden Bestimmungen, deren Einheit das Maß ist, sich auch eine jede für sich geltend machen, dergestalt, daß einerseits die quantitativen Bestimmungen des Daseins verändert werden können, ohne daß dessen Qualität dadurch affiziert wird, daß aber auch andererseits dies gleichgültige Vermehren und Vermindern seine Grenze hat, durch deren Überschreitung die Qualität verändert wird. So ist z. B. der Temperaturgrad des Wassers zunächst gleichgültig in Beziehung auf dessen tropfbare Flüssigkeit, es tritt dann aber beim Vermehren oder Vermindern der Temperatur des tropfbar flüssigen Wassers ein Punkt ein, wo dieser Kohäsionszustand sich qualitativ ändert und das Wasser einerseits in Dampf und andererseits in Eis verwandelt wird. Wenn eine quantitative Veränderung stattfindet, so erscheint dies zunächst als etwas ganz Unbefangenes, allein es steckt noch etwas anderes dahinter, und diese scheinbar unbefangene Veränderung des Quantitativen ist gleichsam eine List, wodurch das Qualitative ergriffen wird. Die hierin liegende Antinomie des Maßes haben bereits die Griechen unter mancherlei Einkleidungen veranschaulicht.

五 質と量及び其転化

例えば**一粒**の小麦が小麦一積みを形成するかどうかという疑問、若しくは馬の尻尾から引抜かれた**一本**の毛が禿げの尻尾を形成するかどうかというあの別の疑問で以って。人々は有の無頓着な且つ外的な規定性としての量の本性を顧慮して、最初先ずこれらの疑問に否定的に答えがちであろうが、併し直ぐその後で、この無頓着な増減にもその限界があり、かくていつもただ**一粒**づつ続けられた増量によって、一積の麦が成立し、いつもただ**一本**づつの続けてなされた脱毛によって禿げの尻尾が生じるという、一点に遂に達するであろうことも認めねばならぬであろう。或る百姓がいて、快活に歩んでいた彼の驢馬の積荷を若干もんめ宛増やし、とうとう驢馬は堪え切れなくなった重荷のためにくたばったという話も、今あげた事例と相似ている。若し人々がこれらの事柄を単に閑人の無駄なお饒舌だと言い切ろうとするなら、それは甚だしく不当というべきである、何故ならここでは事実上、それを熟知することが又實際的、更に道德的關係からしても大いに重要性を持っているような諸思想を取扱っているのだから。例えば吾々が遣っている金銭の支出に関して、差当り支出の多寡が別に問題とはならない或る余裕の範囲があるものである。ところが倅さで多寡いずれかの方向にその折々の個人的関係によって規定された度合が踏み越えられると、度合の質的本性が(先に説明した水の種々なる温度の例に於ける場合と同じ仕方)で茲に擡頭し、事宜を得たる家計として見られていたものが、忽ち吝嗇たちまりんしよくか若しくは浪費となる。→

So z. B. in der Frage, ob ein Weizenkornⁱ einen Haufen Weizen, oder in jener anderen, ob das Ausreißen eines Haares aus dem Schweif eines Pferdes einen Kahlschweif mache? Wenn man im Hinblick auf die Natur der Quantität als gleichgültiger und äußerlicher Bestimmtheit des Seins vorerst geneigt sein wird, jene Fragen verneinend zu beantworten, so wird man doch demnächst zugeben müssen, daß dieses gleichgültige Vermehren und Vermindern auch seine Grenze hat und daß hierbei endlich ein Punkt erreicht wird, wo durch das fortgesetzte Hinzufügen immer nur eines Weizenkorns ein Haufen Weizen und durch das fortgesetzte Ausziehen immer nur eines Haares ein Kahlschweif entsteht. Ebenso wie mit diesen Beispielen verhält es sich mit jener Erzählung von einem Bauer, welcher die Last seines munter einherschreitenden Esels so lange um ein Lot nach dem anderen vermehrte, bis daß derselbe endlich unter der unerträglich gewordenen Last zusammensank. Man würde sehr Unrecht tun, wenn man dergleichen bloß für ein müßiges Schulgeschwätz erklären wollte, da es sich dabei in der Tat um Gedanken handelt, mit denen vertraut zu sein auch in praktischer und näher in sittlicher Beziehung von großer Wichtigkeit ist. So findet z. B. in Beziehung auf die Ausgaben, welche wir machen, zunächst ein gewisser Spielraum statt, innerhalb dessen es auf ein Mehr und Weniger nicht ankommt; wird dann aber nach der einen oder nach der andern Seite hin das durch die jedesmaligen individuellen Verhältnisse bestimmte Maß überschritten, so macht sich die qualitative Natur des Maßes (in derselben Weise wie bei dem vorher erwähnten Beispiel der verschiedenen Temperatur des Wassers) geltend, und dasjenige, was soeben noch als gute Wirtschaft zu betrachten war, wird zu Geiz oder zu Verschwendung.

i 底本では "Waizenkorn", "Waizen"

五 質と量及び其転化

——同様のことが政治にも適用できる、というのは国家の憲法はその国家の地域の大きさ、人口の数及びその他の量的諸規定に依属せぬものとも見做され依属するとも見做されざるを得ぬということである。例えば数千平方哩の領域と四百万の人口を有てる一つの国家を観察するとき、人は差しづめ、領域の二三平方哩や人口の二三千はこの如き国家の憲法に何ら本質的な影響を与え得るものではないことを、訳けなく承認するであろう。ところが之に反して、一つの国家の増大や減少は遂に、（その他の事情を別として）かかる量的変化のためにすでに、憲法の質的なものがもはや変えられぬままではあり得ぬという一点に出逢うであろうということは、同じく見誤ってはなるまい。瑞西聯邦中の小さい一州の憲法は一大帝国に対しては適合しない、と同様に羅馬共和国の憲法を独逸の一小国家都市へ移植することは当を得ざるものであった。

三 〔第百九節〕

無度合【限度のないもの】とは、先ず、度合がその量的本性によってその質的規定性を越え出ることである。けれども別の量的関係、即ち最初の量的関係の無度合は、同様に質的であるが故に、無度合はまたひとつの度合である。質から定量への、定量から質への二様の移り行きは**無限なる進行**として表象されることができ、——即ち、度合の・無度合に於ける・揚棄作用且つ回復作用として。

- Dasselbe findet dann auch seine Anwendung auf die Politik, und zwar in der Art, daß die Verfassung eines Staates ebensowohl als unabhängig als auch als abhängig von der Größe seines Gebiets, von der Zahl seiner Bewohner und anderen solchen quantitativen Bestimmungen angesehen werden muß. Betrachten wir z. B. einen Staat mit einem Gebiet von tausend Quadratmeilen und einer Bevölkerung von vier Millionen Einwohnern, so wird man zunächst unbedenklich zuzugeben haben, daß ein paar Quadratmeilen Gebiet oder ein paar Tausend Einwohner mehr oder weniger auf die Verfassung eines solchen Staates keinen wesentlichen Einfluß haben können. Dahingegen ist dann aber auch ebensowenig zu verkennen, daß in der fortgesetzten Vergrößerung oder Verkleinerung eines Staats endlich ein Punkt eintritt, wo, abgesehen von allen anderen Umständen, schon um dieser quantitativen Veränderung willen auch das Qualitative der Verfassung nicht mehr unverändert bleiben kann. Die Verfassung eines kleinen Schweizer Kantons paßt nicht für ein großes Reich, und ebenso unpassend war die Verfassung der römischen Republik in ihrer Übertragung auf kleine deutsche Reichsstädte.

§ 109

Das Maßlose ist zunächst dies Hinausgehen eines Maßes durch seine quantitative Natur über seine Qualitätsbestimmtheit. Da aber das andere quantitative Verhältnis, das Maßlose des ersten, ebensosehr qualitativ ist, so ist das Maßlose gleichfalls ein Maß; welche beiden Übergänge von Qualität in Quantum und von diesem in jene wieder als unendlicher Progreß vorgestellt werden können - als das sich im Maßlosen Aufheben und Wiederherstellen des Maßes.

五 質と量及び其転化

補遺 吾々が已に見た如く、量は変化すなわち増大及減少を**容れ得る**のみならず、量は一般にかかるものとして自己自身を越え出ることである。かくて量はそれのかような本性を度合中に於ても保持する。さて併し、度合中に於て存する量が或る限界を乗り越えると、それがためにこれに該応する質が揚棄せられる。が併しそれでもって質一般が否定されるのではなくてこの一定の質が否定せられる、すなわちその位置は直ちに又他の或る質によって占められる。量の単なる変化として、而して又量の質への転化として交互に現れるところの度合のこの過程は、交叉線^(注十二) という形象でもって直観されることができる。吾々は差当り自然界に色々の形態に於てそういう交叉線を見出す。増大と減少によって制約されたる質的に種々なる水の聚合状態はすでに先きに考慮された。金属の種々なる酸化程度も同様な関係にある。音の区別もまた度合の過程に於て起るかの差当り単に量的なるものの質的变化への転回の一例として見られることができる。

四 〔第一百節〕

ここで実際に起ることは、度合そのものになお属している**直接性**が揚棄せられることである。質及び・量は度合に於ては差当り**直接的**なものとして存在する、而して度合は質及量の**相対的同一性**に過ぎない。併し度合は、無度合に揚棄されると共に、それにも拘わらず、度合の否定ではあるが併しそれ自身質と量との統一態であるところの・無度合に於て依然として**自己自身**とのみ合一することを自ら示す。

注十二 二つの面の交叉する線の謂いである。

Zusatz. Die Quantität ist, wie wir gesehen haben, nicht nur der Veränderung, d. h. der Vermehrung und Verminderung fähig, sondern sie ist überhaupt als solche das Hinausschreiten über sich selbst. Diese ihre Natur bewährt die Quantität dann auch im Maße. Indem nun aber die im Maß vorhandene Quantität ein gewisse Grenze überschreitet, so wird dadurch auch die derselben entsprechende Qualität aufgehoben. Hiermit wird jedoch nicht die Qualität überhaupt, sondern nur diese bestimmte Qualität negiert, deren Stelle sofort wieder durch eine andere Qualität eingenommen wird. Man kann diesen Prozeß des Maßes, welcher sich abwechselnd als bloße Veränderung der Quantität und dann auch als ein Umschlagen der Quantität in Qualität erweist, unter dem Bilde einer Knotenlinie zur Anschauung bringen. Dergleichen Knotenlinien finden wir zunächst in der Natur unter mancherlei Formen. Der durch Vermehrung und Verminderung bedingten, qualitativ verschiedenen Aggregatzustände des Wassers wurde bereits früher gedacht. In ähnlicher Weise verhält es sich mit den verschiedenen Oxydationsstufen der Metalle. Auch der Unterschied der Töne kann als ein Beispiel des im Prozeß des Maßes stattfindenden Umschlagens des zunächst bloß Quantitativen in qualitative Veränderung betrachtet werden.

§ 110

Was hierin in der Tat geschieht, ist, daß die Unmittelbarkeit, welche noch dem Maße als solchem zukommt, aufgehoben wird; Qualität und Quantität selbst sind an ihm zunächst als unmittelbare, und es ist nur ihre relative Identität. Das Maß zeigt sich aber, in das Maßlose sich aufzuheben, jedoch in diesem, welches dessen Negation, aber selbst Einheit der Quantität und Qualität ist, ebensosehr nur mit sich selbst zusammenzugehen.

五 〔第百十一節〕

無限なるもの、否定の否定としての肯定は、有と無・或るものと他のもの等々の抽象的側面の代りに、今や質と量をその側面とした。差当りまづ、(A) それらは質が量に（第九十八節^(注十三)）及び量が質に（第百五節^(注十四)）**移行行ける**ものである、従って両者は**否定**として示されている。(B) 併し、それらの**統一態**（度合）に於て質と量は差当り区別されている、一方は他方を**介して**のみあるのである。(C) この統一の直接性は揚棄せられるものだと自ら証したことによって、今やこの統一は、それが即自的にあるところのものとして、有一般及びその諸形式を揚棄されたるものとして自分の内に含むところの単純なる自己関係として、**定立**されている。——それ自身の否定によって**自身との**媒介並びに自己自身との関係であるところの有若しくは直接性は、従って又自己関係に即ち直接性に揚棄せられる媒介は、**本質**である。

注十三 第九十八節に於ては、質から量への移りゆきが語られている。勿論ヘーゲルの所謂質とは物の性質の意ではない。故に質から量への移りゆきは、畢竟するに論理学の有論全体の理解の上でなくては、困難である。九十八節の本文をあげて置く。（尚、『ヘーゲル及弁証法研究』に連載される三枝の一般に有論についての論文を参照）『数多（die Vielen）』はそれぞれ互いに一なるものである。だから数多はそれぞれ一であり同一のものである。若しくは、反撥がそれ自体に於て観られると、数多の一の相互の否定的態度としての反撥はまさに本質的には数多の一の相互関係である。それらへーがはねつけながら関係するところの諸多のものはすべて一なのであるから、一はそれらに於て自分自身に關係するのである。だから、反撥はまさに本質的には**牽引**（Attraktion）である。そして廢外作用的な一若しくは対自有は揚棄される。一に於てその**即自且対自的**なる規定有が達し得たところの質的規定性は、かくして**揚棄されたるもの**としての規定性に、換言すれば量としての有に移っている。』

§ 111

Das Unendliche, die Affirmation als Negation der Negation, hatte statt der abstrakteren Seiten, des Seins und Nichts, Etwas und eines Anderen usf., nun die Qualität und Quantität zu seinen Seiten. Diese sind α) zunächst die Qualität in die Quantität (§ 98) und die Quantität in die Qualität (§ 105) übergegangen und damit beide als Negationen aufgezeigt. β) Aber in ihrer Einheit (dem Maße) sind sie zunächst unterschieden und die eine nur vermittels der anderen; und γ) nachdem sich die Unmittelbarkeit dieser Einheit als sich aufhebend erwiesen, so ist diese Einheit nunmehr gesetzt als das, was sie an sich ist, als einfache Beziehung-auf-sich, welche das Sein überhaupt und dessen Formen als aufgehobene in sich enthält. - Das Sein oder die Unmittelbarkeit, welche durch die Negation ihrer selbst Vermittlung mit sich und Beziehung auf sich selbst ist, somit ebenso Vermittlung, die sich zur Beziehung auf sich, zur Unmittelbarkeit aufhebt, ist das Wesen.

注十四 注十三と同様に、ここでも第百五節の本文をあげて置く。『定量がその**対自有的**規定性に於て自分自身に**外的で有る**ことは、定量の質を構成する。定量は外的であることに於て正にそれ自身であり、そして自分に関係している。別言すれば、外的性、すなはち量的なるものと、対自有すなわち質的なるものが定量に於て合一されている。かように定立されると、定量は何よりも先ず直接的なるものではない、でなくては量的なる **Verhältnis** 【関係】である。

五 質と量及び其転化

補遺 度合の過程は、ただに質から量への・且つ量から質への・回帰的転化のかたちにあける無限進行の悪無限性であるのではなくて、同時にその他者にあける自己自身との合一作用の無限性である。質と量は度合にあて互いに先ず或るものと他のものとして対立している。ところが即自的には質は量である、同様に逆に**即自的**には量は質である。そこでこれら両者が度合の過程にあて互に移行し合うことによって、これら両規定のいずれもが、ただそれが即自的に既にあるところのものとなる、そして今や吾々は、その諸規定にあて否定されたる・即ち一般に揚棄されたる有、換言すれば**本質**をもち得ている。――普通の意識は物を有るものと解し、且つこれを質・量・度合の上から観察する。併しやがてこれらの直接的規定は固定的でなく移りゆくものとしてわかつてくる、而して本質はそれらの諸規定の弁証法の成果である。本質の中にはもはや如何なる移行も存しないで、ただ関係のみがある。関係の形式は有にあつてはただやつと吾々の反省であるに過ぎない。これに反して本質にあつては関係はその固有の規定である。→

Zusatz. Der Prozeß des Maßes ist nicht bloß die schlechte Unendlichkeit des unendlichen Progresses in der Gestalt eines perennierenden Umschlagens von Qualität in Quantität und von Quantität in Qualität, sondern zugleich die wahre Unendlichkeit des in seinem Anderen mit sich selbst Zusammengehens. Qualität und Quantität stehen im Maß einander zunächst als Etwas und Anderes gegenüber. Nun aber ist die Qualität an sich Quantität und ebenso ist umgekehrt die Quantität an sich Qualität. Indem somit diese beiden im Prozeß des Maßes ineinander übergehen, so wird eine jede dieser beiden Bestimmungen nur zu dem, was sie an sich schon ist, und wir erhalten jetzt das in seinen Bestimmungen negierte, überhaupt das aufgehobene Sein, welches das Wesen ist. Im Maß war an sich schon das Wesen, und sein Prozeß besteht nur darin, sich als das zu setzen, was es an sich ist. - Das gewöhnliche Bewußtsein faßt die Dinge als seiende auf und betrachtet dieselben nach Qualität, Quantität und Maß. Diese unmittelbaren Bestimmungen erweisen sich dann aber nicht als feste, sondern als übergehende, und das Wesen ist das Resultat ihrer Dialektik. Im Wesen findet kein Übergehen mehr statt, sondern nur Beziehung. Die Form der Beziehung ist im Sein nur erst unsere Reflexion; im Wesen dagegen ist die Beziehung dessen eigene Bestimmung.

五 質と量及び其転化

若し（有の領域に於て）或るものが他のものとなるとすれば、その際或るものは消失している。本質に於てはそうではない。ここでは吾々は正真鉦明【正真正銘】の他者なるものを持たないで、差別を、即ち或るひとつのものの**それ**の他のものとの関係を持つのみである。だから本質の移行は同時に移行ではないのだ。何故なれば、差別的なものの差別的なものへの移行に於ては差別は消失し、それらの差別的なものはそれらの関係中に存している。例えば、吾々が**有**と**無**と言うとき、有は自立的であり、と同様無も自立的である。ところが**肯定的なもの**と**否定的なもの**^(注十五)とは全然趣きを異にする。勿論これらは有と無の規定を持っている。併し、肯定的なものは自立的には如何なる意義も持っていない、それは全く否定的なものと関係し合っている。否定的なものについても同様である。有の領域に於ては被関係性はただ**即自的**であるにとどまっている。反之本質に於ては被関係性は定立されている。だからこれが一般に有と本質の諸形式の区別である。有に於ては一切は直接的である、反之本質に於ては一切は相関的である。

注十五 論理学の有論に於て最初にあらわれる対立は有と無である。

本質論に於て最初にあらはれている対立は肯定的なものと否定的なものである。

Wenn (in der Sphäre des Seins) das Etwas zu Anderem wird, so ist hiermit das Etwas verschwunden. Nicht so im Wesen; hier haben wir kein wahrhaft Anderes, sondern nur Verschiedenheit, Beziehung des Einen auf sein Anderes. Das Übergehen des Wesens ist also zugleich kein Übergehen; denn beim Übergehen des Verschiedenen in Verschiedenes verschwindet das Verschiedene nicht, sondern die Verschiedenen bleiben in ihrer Beziehung. Sagen wir z. B. Sein und Nichts, so ist Sein für sich, und ebenso ist Nichts für sich. Ganz anders verhält es sich mit dem Positiven und Negativen. Diese haben zwar die Bestimmung des Seins und des Nichts. Aber das Positive hat für sich keinen Sinn, sondern es ist dasselbe schlechthin auf das Negative bezogen. Ebenso verhält es sich mit dem Negativen. In der Sphäre des Seins ist die Bezogenheit nur an sich; im Wesen dagegen ist dieselbe gesetzt. Dies ist also überhaupt der Unterschied der Formen des Seins und des Wesens. Im Sein ist alles unmittelbar, im Wesen dagegen ist alles relativ.

六 悟性に於ける移行作用

理性に対して置かれた悟性の本質の理解は、ヘーゲル弁証法把握の重大な要件である。ヘーゲルは悟性について屢々語る。目次の三『論理的なもの三側面』の第二節の補遺に於ても適切な説明が試みられている。ここに摘出した論文は、理性に対する悟性の特質を示し且つその移行作用を明かにせるもので、エンチクロペディー（第二、三版）第一編としての『論理の科学』の第二百十四節の注の全文である。

悟性は、理念について言われる一切のものをそれ自身で**矛盾せるもの**として指摘するというやさしい仕事を持っている。このことはまた悟性に返報されることができ、若しくはむしろ、このことはすでに理念の中で遂行されている——それは理性の仕事であって、たしかに悟性のその如くやさしくはない一つの仕事である。——それ故に悟性が、理念はそれ自身に矛盾する、と告げるとき、理由を挙げて例えば主観的なものはただ主観的なものであって・客観的なものはむしろこれに対立せるものである、有は概念よりも全然別な或るものであって・だからそれから撮み出され得るものではない、同様に有限的なものはただ有限なのであって・正に無限的なものの反対である、従ってそれと同一ではないと、その他すべての諸規定についても悉くかくの如く告げるとき、むしろ論理学はそれとは真反対のことを明示する、すなわち、ただ主観的であるべき主観的なもの、ただ有限であるべき有限的なもの、ただ無限であるべき無限的なもの、等々は、如何なる真理性をも持たず、それ自身に矛盾してい、そしてその反対に移って行く、かくてこの移行作用こそが、且つ、それに於ては両極が揚棄されたるものとして・映出作用若しくは諸契機としてあるところの統一こそが、それらの真理として示される、ということを明示する。

i 底本では、訳文にはここに改行が入っていないが、独文に合わせて入れた。

„Encyklopädie“

Erster Theil. *Die Wissenschaft der Logik*

Dritte Abtheilung. *Die Lehre vom Begriff*

C *Die Idee.*

§ 214

[Die Idee kann als die Vernunft (dies ist die eigentliche philosophische Bedeutung für Vernunft), ferner als Subjekt-Objekt, als die Einheit des Ideellen und Reellen, des Endlichen und Unendlichen, der Seele und des Leibs, als die Möglichkeit, die ihre Wirklichkeit an ihr selbst hat, als das, dessen Natur nur als existierend begriffen werden kann usf., gefaßt werden, weil in ihr alle Verhältnisse des Verstandes, aber in ihrer unendlichen Rückkehr und Identität in sich enthalten sind.]

Der Verstand hat leichte Arbeit, alles, was von der Idee gesagt wird, als in sich widersprechend aufzuzeigen. Dies kann ihm ebenso heim gegeben werden, oder vielmehr ist es schon in der Idee bewerkstelligt; - eine Arbeit, welche die Arbeit der Vernunft und freilich nicht so leicht wie die seinige ist. - Wenn der Verstand zeigt, daß die Idee sich selbst widerspreche, weil z. B. das Subjektive nur subjektiv und das Objektive demselben vielmehr entgegengesetzt, das Sein etwas ganz anderes als der Begriff sei und daher nicht aus demselben herausgeklaut werden könne, ebenso das Endliche nur endlich und gerade das Gegenteil vom Unendlichen, also nicht mit demselben identisch sei, und so fort durch alle Bestimmungen hindurch, so zeigt vielmehr die Logik das Entgegengesetzte auf, daß nämlich das Subjektive, das nur subjektiv, das Endliche, das nur endlich, das Unendliche, das nur unendlich sein soll und so ferner, keine Wahrheit hat, sich widerspricht und in sein Gegenteil übergeht, womit dies Übergehen und die Einheit, in welcher die Extreme als aufgehobene, als ein Scheinen oder Momente sind, sich als ihre Wahrheit offenbart.

i ここまでが、§214 の本文の全文。

六 悟性に於ける移行作用

理念に手をつける悟性は二重の誤解である、というは悟性は**先ず**理念の両極を、**両極がそれらの統一に於て**ある限り如何に言い表されようとかまわないが、それらの具体的統一に於てではなくて、その外部にある**諸抽象**であるかの如き意味に取る。これと同様、悟性は**関係**を誤解する、関係がすでに明瞭に定立されている場合ですらもそうである。悟性は、例えば個別者乃至主語について、個別者は個別なものではなく、一般的なものであると陳言するところの判断に於ける**繫辞**の本性を^{みのが}看遁す。——ⁱ悟性は、**何はさて措き**、自己と同一的なる理念はそれ自身の**否定的なもの**、矛盾を含むという**自分の反省**を、理念そのものの中には落ちないひとつの**外面的反省**だと採っている。併し、じっさいにはこのことは悟性に固有の思慮ではない、そうでなくて、理念はかような否定性であるが故に、永遠に、自己と同一的なるものを差別的なものから、主観的なるものを客観的なるものから、有限的なるものを無限的なるものから、心靈を肉体から析出し区別するところの、弁証法である、然る限りに於てのみ永遠の創造であり、永遠の生命性である、そして永遠の精神である。理念はかくてそれ自身むしろ移行作用であり、**抽象的悟性**への自己転移作用であることによって、同様に永遠に**理性**である。理念は、かかる悟性的被区別者にその本性を、及びその産出物の独立性の誤れる仮象を、再び理解せしめて統一に帰入せしめるところの弁証法である。この二重の運動は時間的でなく、尚また何かの仕方で分離されても区別されてもいないから、——若しそうでなかったらそれは再びただ抽象的悟性であるに過ぎぬであろう、——この運動はそれ自身の・他者に於ける永遠の直観作用である、その客観性に於て**自己自身**を完成したところの概念である、**内的合目的性**、本質的主観性たるところの客観である。ⁱⁱ

i 底本では、なぜか、行末まで線が引かれている。

ii 底本では改行されていないが、独文に合わせる。

Der Verstand, welcher sich an die Idee macht, ist der doppelte Mißverstand, daß er erstlich die Extreme der Idee, sie mögen ausgedrückt werden, wie sie wollen, in sofern sie in ihrer Einheit sind, noch in dem Sinne und der Bestimmung nimmt, insofern sie nicht in ihrer konkreten Einheit, sondern noch Abstraktionen außerhalb derselben sind. Nicht weniger erkennt er die Beziehung, selbst auch wenn sie schon ausdrücklich gesetzt ist; so übersieht er z. B. sogar die Natur der Kopula im Urteil, welche vom Einzelnen, dem Subjekte, aussagt, daß das Einzelne ebensowohl nicht Einzelnes, sondern Allgemeines ist. - Vor andere hält der Verstand seine Reflexion, daß die mit sich identische Idee das Negative ihrer selbst, den Widerspruch, enthalte, für eine äußerliche Reflexion, die nicht in die Idee selbst falle. In der Tat ist dies aber nicht eine dem Verstande eigene Weisheit, sondern die Idee ist selbst die Dialektik, welche ewig das mit sich Identische von dem Differenten, das Subjektive von dem Objektiven, das Endliche von dem Unendlichen, die Seele von dem Leibe, ab- und unterscheidet und nur insofern ewige Schöpfung, ewige Lebendigkeit und ewiger Geist ist. Indem sie so selbst das Übergehen oder vielmehr das sich Übersetzen in den abstrakten Verstand ist, ist sie ebenso ewig Vernunft; sie ist die Dialektik, welche dieses Verständige, Verschiedene über seine endliche Natur und den falschen Schein der Selbständigkeit seiner Produktionen wieder verständigt und in die Einheit zurückführt. Indem diese gedoppelte Bewegung nicht zeitlich, noch auf irgendeine Weise getrennt und unterschieden ist - sonst wäre sie wieder nur abstrakter Verstand -, ist sie das ewige Anschauen ihrer selbst im Anderen; der Begriff, der in seiner Objektivität sich selbst ausgeführt hat, das Objekt, welches innere Zweckmäßigkeit, wesentliche Subjektivität ist.

——理念を捕捉する**種々なる仕方**、即ち観念的なものと実在的なものとの、**有限なるものと無限なるものとの、同一性と異別との**、等々の統一としてのそれは、多少の差はあれ**形式的**である、というのはそれらは**一定の概念**のどれかの或る一つの段階を語るものなのだから。概念それ自身のみが自由である、そして真実に**一般的なるものである**。それ故に、理念に於ては概念の**規定性**はただ概念自身である。すなわち、それへ概念が一般的なるものとして自己自身を続いて定立するところの、且つそれに於て概念が、かれ自身の、総体的の規定性を有するところのひとつの客観性。理念は、その両項ⁱのどれもが独立せる全体性であり、且つどれもが自ら完成することによって同時に他の項に移って行っているそういう**無限なる判断**である。——その他の規定された諸概念のいずれとでも、その両項——**概念自身と客観性**ⁱⁱ——に於て完成されたるかかる全体性ではない。

i „Urteil“ を最後に持ってきて訳しているので、「両項」が何を指すか曖昧になっている。「理念とは、無限の原-分割 Ur-teil であり、分割された二項は」と長谷川宏訳はしている。

ii 底本では、「概念」と「客観性」に傍点が欠けている。

Die verschiedenen Weisen, die Idee aufzufassen, als Einheit des Ideellen und Reellen, des Endlichen und Unendlichen, der Identität und der Differenz und so fort, sind mehr oder weniger formell, indem sie irgendeine Stufe des bestimmten Begriffs bezeichnen. Nur der Begriff selbst ist frei und das wahrhaft Allgemeine; in der Idee ist daher seine Bestimmtheit ebenso nur er selbst, - eine Objektivität, in welche er als das Allgemeine sich fortsetzt und in der er nur seine eigene, die totale Bestimmtheit hat. Die Idee ist das unendliche Urteil, dessen Seiten jede die selbständige Totalität und eben dadurch, daß jede sich dazu vollendet, in die andere ebensosehr übergegangen ist. Keiner der sonst bestimmten Begriffe ist diese in ihren beiden Seiten vollendete Totalität als der Begriff selbst und die Objektivität.

七 絶対的理念

この論文はエンチクロペディー第一編としての『論理の科学』
第三部『概念論』のC理念中のc『絶対的理念』に該当する。
但しその最後の一節は省略されている。

一 〔自第二百三十六節〕

主観的理念と客観的理念との統一としての理念が理念の概念である、それにとっては理念そのものが対象であり、客観は理念そのものである、——すなわちそのうちに一切の諸規定が合流しているひとつの客観。従ってこの統一は**絶対的な且つ一切の真理**であり、自己自身を思惟する理念である。而もここでは思惟するものとして・**論理的理念**としてのものである。

補遺 絶対的理念は先ず理論的理念と実践的理念との統一である、従って同時に生命の理念と認識作用の理念との統一である。吾々は認識作用に於て差別の形態に於ける理念を持った、而して認識作用の過程はこの差別の征服として且つ先きの統一——^(注十六) 謂うところの統一とは、そのものとして、すなわちその直接性に於ては、先ず最初には生命の理念である、——の回復として吾々に把握された。生命の欠陥は、ただやと**即自的**に存在する理念たるの点にある。これに対して認識作用は同様に一面的でただ**対自的**に存在する理念である。この両者の統一及び真理性は**即自的且つ対自的**に存在する、従って**絶対的**理念である。——我々は是迄種々なる段階を通じての発展に於ける理念を対象として来た。今や併し**理念は自己自身**に対象的である。これが既にアリストテレスが理念の最高形式として挙げた思惟の思惟である。
ノエシス・ノエゼオーシス

注十六 論理の科学第三部概念論中の第三の段階理念論は生命・認識作用・絶対的理念の三つに分れる。先きの統一とはこの生命の理念を指す。

Die absolute Idee

„Encyklopädie“

Erster Theil. *Die Wissenschaft der Logik*

Dritte Abtheilung. *Die Lehre vom Begriff*

C. *Die Idee.*

c. *Die absolute Idee*

§ 236

Die Idee als Einheit der subjektiven und der objektiven Idee ist der Begriff der Idee, dem die Idee als solche der Gegenstand, dem das Objekt sie ist; - ein Objekt, in welches alle Bestimmungen zusammengegangen sind. Diese Einheit ist hiermit die absolute und alle Wahrheit, die sich selbst denkende Idee, und zwar hier als denkende, als logische Idee.

Zusatz. Die absolute Idee ist zunächst die Einheit der theoretischen und der praktischen Idee und damit zugleich die Einheit der Idee des Lebens und der Idee des Erkennens. Im Erkennen hatten wir die Idee in der Gestalt der Differenz, und der Prozeß des Erkennens hat sich uns als die Überwindung dieser Differenz und als die Wiederherstellung jener Einheit ergeben, welche als solche und in ihrer Unmittelbarkeit zunächst die Idee des Lebens ist. Der Mangel des Lebens besteht darin, nur erst die an sich seiende Idee zu sein; dahingegen ist ebenso einseitigerweise das Erkennen die nur für sich seiende Idee. Die Einheit und Wahrheit dieser beiden ist die an und für sich seiende und hiermit absolute Idee. - Bisher haben wir die Idee in der Entwicklung durch ihre verschiedenen Stufen hindurch zu unserem Gegenstand gehabt; nunmehr aber ist die Idee sich selbst gegenständlich. Dies ist die νόησις νοήσεως, welche schon Aristoteles als die höchste Form der Idee bezeichnet hat.

二 〔第二百三十七節〕

絶対的理念は対自的に、その中に如何なる移行も如何なる前提も尚又一般に流動的且つ透明ならざる如何なる規定も存せざるが故に、**その内容**を自己そのものとして直観するところの概念の**純粹形式**である。絶対的理念は、自己からのそれ自身の観念的区別作用であり、而して区別されたものの一つは自己と同一であり、而もその内には形式の総体性が内容諸規定の体系として含まれている限りに於て、自己が自己にとって**内容**である。この内容は**論理的なるもの**の体系である。ここで**形式**として理念に残るものはこの内容の**方法**の外何ものでもない、——即ち理念の諸契機の持続についての明確な知識である。

補遺 絶対的理念に就て語られると、人々は、ここに至って始めて本物が出る、ここでこそ一切が解らねばならぬ、という臆見を抱き得るものである。かくて確に人々は絶対的理念に関して無内容なことを思い切り方途もなく弁じ立てることができる、併し真の内容とは、実にその発展を吾々が是迄観て来たところの全体系の謂に外ならぬ。かくてこうも言われ得る、絶対的理念とは一般的なものであると、と云っても併し、特殊的内容がひとつの他者としてそれに対立するところの単に抽象的な形式としてではなくて、その中には一切の諸規定が、及びそれらの諸規定によって定立されたる内容の全豊饒が、戻って来ている絶対的形式としてである。この意味よりすれば、絶対的理念は、子供と同様の宗教の教条を発言する老人——この人にとっては宗教の教条は彼の全生涯の意義を持つ——に比せられる。→

§ 237

Für sich ist die absolute Idee, weil kein Übergehen noch Voraussetzen und überhaupt keine Bestimmtheit, welche nicht flüssig und durchsichtig wäre, in ihr ist, die reine Form des Begriffs, die ihren Inhalt als sich selbst anschaut. Sie ist sich Inhalt, insofern sie das ideelle Unterscheiden ihrer selbst von sich und das eine der Unterschiedenen die Identität mit sich ist, in der aber die Totalität der Form als das System der Inhaltsbestimmungen enthalten ist. Dieser Inhalt ist das System des Logischen. Als Form bleibt hier der Idee nichts als die Methode dieses Inhalts, - das bestimmte Wissen von der Währung ihrer Momente.

Zusatz. Wenn von der absoluten Idee gesprochen wird, so kann man meinen, hier werde erst das Rechte kommen, hier müsse sich alles ergeben. Gehaltlos deklamieren kann man allerdings über die absolute Idee in das Weite und Breite; der wahre Inhalt ist indes kein anderer als das ganze System, dessen Entwicklung wir bisher betrachtet haben. Es kann hiernach auch gesagt werden, die absolute Idee sei das Allgemeine, aber das Allgemeine nicht bloß als abstrakte Form, welchem der besondere Inhalt als ein Anderes gegenübersteht, sondern als die absolute Form, in welche alle Bestimmungen, die ganze Fülle des durch dieselbe gesetzten Inhalts zurückgegangen ist. Die absolute Idee ist in dieser Hinsicht dem Greis zu vergleichen, der dieselben Religionssätze ausspricht als das Kind, für welchen dieselben aber die Bedeutung seines ganzen Lebens haben.

七 絶対的理念

子供が宗教的内容を領解するにしても、子供にはこの内容は単に、全生命及び全世界が尚その外に横たわる如きものとして価せるに過ぎない。——人間的生命一般及びこれの内容を構成する諸事件についても同様の関係にある。すべての仕事は只管^{ひたすら}に目的物にのみ向けられる、これが達せられたときは、人々は意欲せられたものより他の何ものをも見出さないことに驚く。〔然るに〕関心は全運動の上にある。人間が彼の生活を遂行するとき、そのとき彼には目的は大層限定されたものとし現れ得る、が併しそこに包括されているものは実に生命の全経過である。——その様に絶対的理念の内容も亦、吾々が是迄^{これまで}実見せる全展開に外ならぬ。発展全体が内容と関心とを構成するという洞察が結局のものである。——更に、それ自身だけで考えられると制限されたものに見えるものが、それが全体に属し且つ理念の一契機であるということによってその価値を獲得する、ということこそは哲学的見解である。吾々がこれ迄持った内容はこういうものであった。尚吾々が持つところのものは、内容は理念の生ける発展であるという知識であり、而してこの単純なる回顧は形式に於て含まれている。これ迄考察して来た諸段階の一つ一つは各々絶対者の一形像である、が併し先ず限定された仕方に於てであり、その故に各段階は全体へと駆り立てられる、この全体の発展こそは吾々が方法と呼んだところのものである。

Wenn auch das Kind den religiösen Inhalt versteht, so gilt ihm derselbe doch nur als ein solches, außerhalb dessen noch das ganze Leben und die ganze Welt liegt. - Ebenso verhält es sich dann auch mit dem menschlichen Leben überhaupt und den Begebenheiten, die den Inhalt desselben ausmachen. Alle Arbeit ist nur auf das Ziel gerichtet, und wenn dies erreicht ist, so ist man verwundert, nichts anderes zu finden als eben dies, was man wollte. Das Interesse liegt in der ganzen Bewegung. Wenn der Mensch sein Leben verfolgt, dann kann ihm das Ende als sehr beschränkt erscheinen, aber der ganze *decursus vitae*ⁱ ist es, welcher darin zusammengenommen ist. - So ist denn auch der Inhalt der absoluten Idee die ganze Ausbreitung, die wir bisher vor uns hatten. Das Letzte ist die Einsicht, daß die ganze Entfaltung den Inhalt und das Interesse ausmacht. - Weiter ist dies die philosophische Ansicht, daß alles, was für sich genommen als ein Beschränktes erscheint, dadurch seinen Wert erhält, daß es dem Ganzen angehört und Moment der Idee ist. So ist es, daß wir den Inhalt gehabt haben, und was wir noch haben, das ist das Wissen, daß der Inhalt die lebendige Entwicklung der Idee ist, und dieser einfache Rückblick ist in der Form enthalten. Eine jede der bisher betrachteten Stufen ist ein Bild des Absoluten, aber zunächst in beschränkter Weise, und so treibt sie sich fort zum Ganzen, dessen Entfaltung dasjenige ist, was wir als Methode bezeichneten.

i 底本では強調されていないが "*decursus vitae*" ラテン語らしい。"course of life"

三 〔第二百三十八節〕

〔さてかかる〕思弁的方法の諸契機は、

(イ) **端緒**、すなわち**有**若しくは**直接的なるもの**である。対自的に、それが端緒であるという単純な理由からである。併し思弁的理念からすれば、有は、概念の絶対的否定性若しくは運動として**判断し**而して自分自身の否定的なものとして自己を定立するところの、理念の**自己規定**である。端緒そのものにとって抽象的肯定として現れる**有は、寧ろ否定、定立されたる有、媒介されたる有一般、及び前提されたる有**である。然るに若し有が**概念**の否定として見られるならば、有は、概念として定立されざる概念、若しくは即自的概念である、蓋し概念はそれの他有に於ても全く自己と同一であり、それ自身の確実性であるから。——それ故この有は、未だ規定されざる、即ち単に即自的に若しくは直接的に規定されたる概念として、同様にまた**一般的なるもの**である。

端緒は直接的な有という意味では直観及び知覚から取られる、——これが有限的認識の**分析的**方法の端緒である、端緒は一般性の意味では、有限的認識作用の**綜合的**方法の端緒である。併し論理的なるものは直接的に一般的なものであると共に有るところのものであり、尚又概念から前提されたるのものであると共に直接的に概念自身であるが故に、論理的なるものの端緒は分析的であると共に**綜合的**である。

§ 238

Die Momente der spekulativen Methode sind α) der Anfang, der das Sein oder Unmittelbare ist; für sich aus dem einfachen Grunde, weil er der Anfang ist. Von der spekulativen Idee aus aber ist es ihr Selbstbestimmen, welches als die absolute Negativität oder Bewegung des Begriffs urteilt und sich als das Negative seiner selbst setzt. Das Sein, das für den Anfang als solchen als abstrakte Affirmation erscheint, ist so vielmehr die Negation, Gesetztheit, Vermitteltsein überhaupt und Vorausgesetztsein. Aber als die Negation des Begriffs, der in seinem Anderssein schlechthin identisch mit sich und die Gewißheit seiner selbst ist, ist es der noch nicht als Begriff gesetzte Begriff oder der Begriff an sich. - Dies Sein ist darum als der noch unbestimmte, d. i. nur an sich oder unmittelbar bestimmte Begriff ebenso sehr das Allgemeine.

Der Anfang wird im Sinne des unmittelbaren Seins aus der Anschauung und Wahrnehmung genommen, - der Anfang der analytischen Methode des endlichen Erkennens; im Sinn der Allgemeinheit ist er der Anfang der synthetischen Methode desselben. Da aber das Logische unmittelbar ebenso Allgemeines als Seiendes, ebenso von dem Begriffe sich Vorausgesetztes als unmittelbar er selbst ist, so ist sein Anfang ebenso synthetischer als analytischer Anfang.

七 絶対的理念

補遺 哲学的方法は分析的であると共に総合的である、併し有限的認識のこの両方法の単なる並存若しくは単なる交替という意味に於てではなく、否むしる哲学的方法はそれらの両方法を揚棄されたものとして己れの中に含み、従ってその諸運動の各々に於て同時に分析的且つ総合的に振舞うのである。哲学的思惟は、それが己れの対象たる理念を単に受け入れるのみで、それをそのままにしておき、そうしてその運動及び発展を謂わば単に見つめるのみである限りに於ては、分析的に振舞う。哲学的思索はその限り全く受動的である。同様に併し哲学的思惟は総合的であり、概念自身の活動として自らを示す。それには併し、よく出しゃばろうとする自身の思い付きや特殊的な臆見を自身から遠ざける、という努力が必須事である。

四 〔第二百三十九〕

(ロ) **進行**は理念の定立されたる**判断**である・直接的一般者は、即自的概念として、概念それ自身に於て概念の直接性と一般性をひとつの契機にひき貶げるところの、弁証法である。かくて端緒の**否定的なもの**が、若しくはその最初のものがその**規定性**に於て、定立される。それは**一に対して**いる〔一に目覚めている〕、区別されたるものの**関係**である、——即ち**反省の契機**である。

この進行は、内在的弁証法によって直接的な概念の中に含まれているもののみが定立されるが故に、**分析的**である。——と共にこの概念中にはまだかの区別が定立されていなかったが故に、**総合的**である。

i 「引き下げる」であろう。“herabzusetzen”は「自分の所まで下ろす」

Zusatz. Die philosophische Methode ist sowohl analytisch als auch synthetisch, jedoch nicht in dem Sinn eines bloßen Nebeneinander oder einer bloßen Abwechslung dieser beiden Methoden des endlichen Erkennens, sondern vielmehr so, daß sie dieselben als aufgehoben in sich enthält und demgemäß in einer jeden ihrer Bewegungen sich als analytisch und synthetisch zugleich verhält. Analytisch verfährt das philosophische Denken, insofern dasselbe seinen Gegenstand, die Idee, nur aufnimmt, dieselbe gewähren läßt und der Bewegung und Entwicklung derselben gleichsam nur zusieht. Das Philosophieren ist insofern ganz passiv. Ebenso ist dann aber das philosophische Denken synthetisch und erweist sich als die Tätigkeit des Begriffs selbst. Dazu aber gehört die Anstrengung, die eigenen Einfälle und besonderen Meinungen, welche sich immer hervortun wollen, von sich abzuhalten.

§ 239

β) Der Fortgang ist das gesetzte Urteil der Idee. Das unmittelbare Allgemeine ist als der Begriff an sich die Dialektik, an ihm selbst seine Unmittelbarkeit und Allgemeinheit zu einem Momente herabzusetzen. Es ist damit das Negative des Anfangs oder das Erste in seiner Bestimmtheit gesetzt; es ist für eines, die Beziehung Unterschiedener, - Moment der Reflexion.

Dieser Fortgang ist ebensowohl analytisch, indem durch die immanente Dialektik nur das gesetzt wird, was im unmittelbaren Begriffe enthalten ist, - als synthetisch, weil in diesem Begriffe dieser Unterschied noch nicht gesetzt war.

七 絶対的理念

補遺 理念の進行に於て端緒は、それが即自的にあるところのものとして、即ち定立されたものと且つ媒介されたものとして、自己を示すのであって、有るものや直接的なものとしてではない。唯だ、自身直接的なる意識にとってのみ、自然は始原的なものであり、且つ精神はそれによって媒介されたものである。併し実は自然は精神によって定立されたものであり、自然を己れの前提にするものは精神自身である。

五 〔第二百四十〕

進行の抽象的形式は、**有**に於てはある**他者**であり且つある他者への移行作用である、**本質**に於ては**対立せるものに於ける映出作用**である、**概念**に於ては**個別の普遍性**からの区別性である、ところがこの普遍性はそのままそれから区別されたるものに**続行**し、そして個別との**同一性**としてのものである。

六 〔第二百四十一〕

第二の領域〔即ち進行〕に於て最初に**即自的**に存在する概念が**映出作用**に達する、かくてそれは**即自的には既に理念**である。——第一領域の発展は第二のそれへの移行であるが、この領域の発展は第一の領域への還行となる。この二重の運動を通じてのみ区別はその権利を保有する、何故なら区別されたる両者の各々はそれ自身に即して考察されると全体性として完結するが、かくてこそ他者との統一を逐行するから。**両者の一面性がそれ自身に縁いて自己揚棄されること**、これのみがよく統一を一面的ならしめないのである。

Zusatz. Im Fortgang der Idee erweist der Anfang sich als das was er an sich ist, nämlich als das Gesetzte und Vermittelte und nicht als das Seiende und Unmittelbare. Nur für das selbst unmittelbare Bewußtsein ist die Natur das Anfängliche und Unmittelbare und der Geist das durch dieselbe Vermittelte. In der Tat aber ist die Natur das durch den Geist Gesetzte, und der Geist selbst ist es, der sich die Natur zu seiner Voraussetzung macht.

§ 240

Die abstrakte Form des Fortgangs ist im Sein ein Anderes und Übergehen in ein Anderes, im Wesen Scheinen in dem Entgegengesetzten, im Begriffe die Unterschiedenheit des Einzelnen von der Allgemeinheit, welche sich als solche in das von ihr Unterschiedene continuirt[kontinuuiert] und als Identität mit ihm ist.

§ 241

In der zweiten Sphäre ist der zuerst an sich seiende Begriff zum Scheinen gekommen und ist so an sich schon die Idee. - Die Entwicklung dieser Sphäre wird Rückgang in die erste, wie die der ersten ein Übergang in die zweite ist; nur durch diese gedoppelte Bewegung erhält der Unterschied sein Recht, indem jedes der beiden Unterschiedenen sich an ihm selbst betrachtet zur Totalität vollendet und darin sich zur Einheit mit dem anderen betätigt. Nur das Sich-Aufheben der Einseitigkeit beider an ihnen selbst läßt die Einheit nicht einseitig werden.

七 絶対的理念

七 〔第二百四十二〕

(ハ) 第二の領域は区別されたものの関係を発展して、それが先ずあるところのもの、即ちそれ自身に於ける**矛盾**に達する、——**無限なる進行**に於て、——がこの矛盾は、差別的なものが概念中にあるところのものとして定立されるという**終極**に解ける。終極とは最初のもの否定である、而して最初のものとの同一性としてはそれ自身の否定性である。かくて終極はかかる二つの最初がその中で觀念的なもの且つ契機として・揚棄されたものとして・即ち同時に保存されたものとしてあるところの統一である。概念はかようにその**即自的有**からその差別及びこれが揚棄を経て自分自身と結合する、これが**実現されたる**概念である、換言すればその諸規定の**定立されたる有**をその**対自有**の内に含む概念である、——即ち**理念**である。この終極は理念にとっては同時に絶対的最初（方法に於ける）として、恰も端緒は直接的なるものであつて理念は成果でもあるかのような**仮象の消失**である。——即ち理念はひとつの総体性であるという認識である。

八 〔第二百四十三〕

方法はかくの如くにして外的形式ではなく、内容の心霊であり概念である、内容が形式と区別されてあるのは、**概念**の諸契機が**それら自身に即してもそれらの規定性**に於て概念の総体性として現れるということになるがためである。この規定性若しくは内容は形式と共に理念に還るが故に、理念は**体系的**総体性としてあらわれる、即ちただ**一つ**の理念である、この理念の特殊諸契機は**即自的**には理念である、と共にこの諸契機は概念の弁証法によって理念の單純なる**対自有**を産出する。——かようにして科学は、それ自身の概念を、理念がまさにあるところの純粹理念として把握することを以て終結する。

【最後の第二百四十四節が略されている。】

§ 242

Die zweite Sphäre entwickelt die Beziehung der Unterschiedenen zu dem, was sie zunächst ist, zum Widerspruche an ihr selbst - im unendlichen Progreß -, der sich γ) in das Ende auflöst, daß das Differenten als das gesetzt wird, was es im Begriffe ist. Es ist das Negative des Ersten und als die Identität mit demselben die Negativität seiner selbst; hiermit die Einheit, in welcher diese beiden Ersten als ideelle und Momente, als aufgehobene, d. i. zugleich als aufbewahrte sind. Der Begriff, so von seinem Ansichsein vermittelt seiner Differenz und deren Aufheben sich mit sich selbst zusammenschließend, ist der realisierte Begriff, d. i. der Begriff, das Gesetzsein seiner Bestimmungen in seinem Fürsichsein enthaltend, - die Idee, für welche zugleich als absolut Erstes (in der Methode) dies Ende nur das Verschwinden des Scheins ist, als ob der Anfang ein Unmittelbares und sie ein Resultat wäre; - das Erkennen, daß die Idee die eine Totalität ist.

§ 243

Die Methode ist auf diese Weise nicht äußerliche Form, sondern die Seele und der Begriff des Inhalts, von welchem sie nur unterschieden ist, insofern die Momente des Begriffs auch an ihnen selbst in ihrer Bestimmtheit dazu kommen, als die Totalität des Begriffs zu erscheinen. Indem diese Bestimmtheit oder der Inhalt sich mit der Form zur Idee zurückführt, so stellt sich diese als systematische Totalität dar, welche nur Eine Idee ist, deren besondere Momente ebensowohl an sich dieselbe sind, als sie durch die Dialektik des Begriffs das einfache Fürsichsein der Idee hervorbringen. - Die Wissenschaft schließt auf diese Weise damit, den Begriff ihrer selbst zu fassen, als der reinen Idee, für welche die Idee ist.

八 実践的態度と理論的態度

ここに掲げた論文は „Rechtsphilosophie“ の第四節の補遺より摘出せるものである。この節では Recht の土台は一般に精神であることが語られる、尚その一層手近なる在りどころと出発点は意志であることが示され、進んで意志の自由が論述されている。直接に弁証法に關した文献というべきものではないけれども、人々がヘーゲルに於て畢竟するに実践と理論は如何なる關係にあるかを理解するに役立つ、一つの好資料であるから特に訳出したものである。

意志と思惟の關聯に就ては、次のことが注意さるべきである。元來、精神とは思惟一般であるし、人間が動物から區別されているのは思惟のためである。ところが、このことを次のように決めつけてはいけない、人間は一方では思惟する者、他方では意欲するものと云うように、それから又人間は一方のポケットには思惟を、他方のポケットには意欲を持っていると云った風に表象してはいけない。何故かというにそういう考え方は空虚な表象であるだろうから。思惟と意志との區別は、実は、理論的態度と実践的態度との區別に外ならない。と言っても、思惟と意志は謂わば二つの能力ではない。意志は思惟の一つの特別の仕方なのだ。實際の存在（定有）の中へ轉身するものとしての思惟である、敢て自ら實際の存在となろうとする衝動としての思惟である。

i 『要綱』原著では全く段落を切っていないものもある。底本の切り方は、いくつかの英訳とも異なるが、底本に従う。

„Grundlinien der Philosophie des Rechts“ⁱ

Einleitung. Begriff der Philosophie des Rechts, des Willens, der Freiheit
und des Rechts. § 1—32

§ 4

[Der Boden des Rechts ist überhaupt das Geistige und seine nähere Stelle und Ausgangspunkt der Wille, welcher frei ist, so daß die Freiheit seine Substanz und Bestimmung ausmacht und das Rechtssystem das Reich der verwirklichten Freiheit, die Welt des Geistes aus ihm selbst hervorgebracht, als eine zweite Natur, ist.]

Zusatz.

[Die Freiheit des Willens ist am besten durch eine Hinweisung auf die physische Natur zu erklären. Die Freiheit ist nämlich ebenso eine Grundbestimmung des Willens, wie die Schwere eine Grundbestimmung der Körper ist. Wenn man sagt, die Materie ist schwer, so könnte man meinen, dieses Prädikat sei nur zufällig; es ist es aber nicht, denn nichts ist unschwer an der Materie: diese ist vielmehr die Schwere selbst. Das Schwere macht den Körper aus und ist der Körper. Ebenso ist es mit der Freiheit und dem Willen, denn das Freie ist der Wille. Wille ohne Freiheit ist ein leeres Wort, so wie die Freiheit nur als Wille, als Subjekt wirklich ist.] Was aber den Zusammenhang des Willens mit dem Denken betrifft, so ist darüber folgendes zu bemerken. Der Geist ist das Denken überhaupt, und der Mensch unterscheidet sich vom Tier durch das Denken. Aber man muß sich nicht vorstellen, daß der Mensch einerseits denkend, andererseits wollend sei und daß er in der einen Tasche das Denken, in der anderen das Wollen habe, denn dies wäre eine leere Vorstellung. Der Unterschied zwischen Denken und Willen ist nur der zwischen dem theoretischen und praktischen Verhalten, aber es sind nicht etwa zwei Vermögen, sondern der Wille ist eine besondere Weise des Denkens: das Denken als sich übersetzend ins Dasein, als Trieb, sich Dasein zu geben.

i 三枝の表記では『法哲学講義』§ 4 からの摘出のようだが³、ドイツ語文は『法哲学要綱』と同じものだ。長谷川宏訳を見ると『講義』§ 4 の一部である。

八 実践的態度と理論的態度

思惟と意志とのこの区別はかように言い表されることが出来る。私は或る対象を思惟することに依って、私はその対象を思想にする、その対象から感覺的のものを奪う。即ち私はその対象を、本来且つ直接的に私のものである所のものとなす。何故というに、思惟を俟ってはじめて私は私なのだから、且つ把握することにして始めて、そうなるともはや私に立ち向い合っていないところの対象を突き貫くことであり、且つ私はその対象が排他的に（対自的に）私に對峙して持っていた対象御自身のものを奪ったことになる。アダムがイヴに、**おまえ【du】**は私の肉の肉、私の骨の骨と言えるが様に、恰もその如く精神は、それは私の精神の精神と言う、かくするとき別物たることは消えて無くなっている。一体、表象作用はどれでも一つの普遍化である、ところで普遍化は思惟に属する。或る物を普遍的にすると、それを思惟することである。我は思惟である、と同じく普遍的なるものである。私が**俺れ【ich】**と言う時、私はあらゆる個別を脱落させている、性格だの、気質だの、学識だの、年齢だの。俺れなるものは全く空なものであり、点のようなものであり、単純なものである、だが併しこの単純性の中で大いに活躍している、世界の複雑せる画面が私の前に存在している、私はこれに對立してい、此の態度でもって對立を揚棄している、私はこの内容を私の内容とする。我が世界を知る場合、というよりもっと世界を把握した場合、我は世界をわがものとしている。理論的態度はかかる範圍に止る。

Dieser Unterschied zwischen Denken und Willen kann so ausgedrückt werden. Indem ich einen Gegenstand denke, mache ich ihn zum Gedanken und nehme ihm das Sinnliche, ich mache ihn zu etwas, das wesentlich und unmittelbar das Meinige ist: denn erst im Denken bin ich bei mir, erst das Begreifen ist das Durchbohren des Gegenstandes, der nicht mehr mir gegenübersteht und dem ich das Eigene genommen habe, das er für sich gegen mich hatte. Wie Adam zu Eva sagt, du bist Fleisch von meinem Fleisch und Bein von meinem Bein, so sagt der Geist, dies ist Geist von meinem Geist, und die Fremdheit ist verschwunden. Jede Vorstellung ist eine Verallgemeinerung, und diese gehört dem Denken an. Etwas allgemein machen heißt, es denken. Ich ist das Denken und ebenso das Allgemeine. Wenn ich Ich sage, so lasse ich darin jede Besonderheit fallen, den Charakter, das Naturell, die Kenntnisse, das Alter. Ich ist ganz leer, punktüll, einfach, aber tätig in dieser Einfachheit. Das bunte Gemälde der Welt ist vor mir: ich stehe ihm gegenüber und hebe bei diesem Verhalten den Gegensatz auf, mache diesen Inhalt zu dem meinigen. Ich ist in der Welt zu Hause, wenn es sie kennt, noch mehr, wenn es sie begriffen hat. Soweit das theoretische Verhalten.

八 実践的態度と理論的態度

これに反して、実践的態度は思惟を俟って、我自身を俟って始まり、最初には対立せるものとして現れる、というのは実践的態度は直ちにひとつの分離を示すから。私が実践的であり、活動的であることによって、換言すれば私が行動することによって、私は自分を規定する、自分を規定することは正しく一つの区別を立てることである。ところが私が立てる諸の区別は、然るとき私の区別である。諸規定は私に帰する、而して私がそれへ駆られた目的は私に属している。たとえ私がこれらの諸規定及び区別を外へ出そうとも、換言すれば謂う所の外界に移さうとも、それらは畢竟するに私の規定であり区別である。それらは私が行い私が作ったところのものである。それらは私の精神の足跡をみな持っている。

これが理論的並びに実践的態度の区別でありとすれば、今や両者の係り合いは説明できる。理論的なものは本質的に実践的なものの中に含まれている。両者は分れているものだという表象には副わない、何故というに人は知力なき意志を持っているものではないから。逆に、意志は自分の中に理論的なものを持っている。意志は規定を行う。この規定は先ず内的なるものである。ところが私は私が欲する所のものを表象する、それは私にとっての対象である。動物は本能に従って行動する、内的なるものによって駆られている。然る限り実践的だ。所が動物は欲する所のものを表象しないから、動物は如何なる意志も持たぬ。と同様人は意志なしには理論的態度を取ったり思惟したりするを得ぬ。何故というに一体吾々は思惟する事によって、まさに活動的であるのだから。言うまでもなく思想の内容は存在なる形式を持っている、所がこの存在なる（有なる）ものは、仲介されたるもの、吾々の活動によって打ち建てられたものである。だからこの区別は不可分離である。あらゆる活動、思惟でも意欲でも、その中には二つの契機が見出される。

Das praktische Verhalten fängt dagegen beim Denken, beim Ich selbst an und erscheint zuvörderst als entgegengesetzt, weil es nämlich gleich eine Trennung aufstellt. Indem ich praktisch, tätig bin, das heißt handele, bestimme ich mich, und mich bestimmen heißt, eben einen Unterschied setzen. Aber diese Unterschiede, die ich setze, sind dann wieder die meinigen, die Bestimmungen kommen mir zu, und die Zwecke, wozu ich getrieben bin, gehören mir an. Wenn ich nun auch diese Bestimmungen und Unterschiede herauslasse, das heißt in die sogenannte Außenwelt setze, so bleiben sie doch die meinigen: sie sind das, was ich getan, gemacht habe, sie tragen die Spur meines Geistes.

Wenn dieses nun der Unterschied des theoretischen und praktischen Verhaltens ist, so ist nunmehr das Verhältnis beider anzugeben. Das Theoretische ist wesentlich im Praktischen enthalten: es geht gegen die Vorstellung, daß beide getrennt sind, denn man kann keinen Willen haben ohne Intelligenz. Im Gegenteil, der Wille hält das Theoretische in sich: der Wille bestimmt sich, diese Bestimmung ist zunächst ein Inneres: was ich will, stelle ich mir vor, ist Gegenstand für mich. Das Tier handelt nach Instinkt, wird durch ein Inneres getrieben und ist so auch praktisch, aber es hat keinen Willen, weil es sich das nicht vorstellt, was es begehrt. Ebensowenig kann man sich aber ohne Willen theoretisch verhalten oder denken, denn indem wir denken, sind wir eben tätig. Der Inhalt des Gedachten erhält wohl die Form des Seienden, aber dies Seiende ist ein Vermitteltes, durch unsere Tätigkeit Gesetztes. Diese Unterschiede sind also untrennbar: sie sind eines und dasselbe, und in jeder Tätigkeit, sowohl des Denkens als Wollens, finden sich beide Momente.

九 弁証法断片

(1) 『法律哲学』ⁱ【第三十二節補遺】より

1 科学に於ける概念の発展とその定在形態に於ける概念の発展

普通に人々は、経験的諸科学に於て、表象によって見出されるところのものを分析する、かくて次に特殊的なるものを共通的なものに還元したとき、人々はこれは概念と名づける。ところが、吾々はそうはしない。何故なら、吾々は概念そのものが如何ように自分を規定しそして吾々の臆見や思惟の何ものをもこれに附与しないように吾々を強制するかを、ただ観望しようとするものである。かようにして吾々が獲得するところのものは、けだし思想の一系列、ならびに定在する諸形体の他の一系列である、ところがこの際、現実的現象に於ける時間の秩序は概念の秩序よりも幾分異っているということが出来し得る。例えば、人々は所有は家庭の存在の前にあったということはできない、それにもかかわらず所有は家庭の前に取扱われる。かくするとき人々は茲に次のような疑問を投出すであろう、何故に我々は最高のもの、換言すれば具体的に真当のものから始めないか？と。答はこうだ、吾々は真当のものを成果のかたちに於いて見ようとするから、そしてそれには抽象的概念そのものを先ず把握することが本質的に必要なことだから。だから、現実的に存在するところのものは、概念の形体は、吾々にとっては出て来るものでありこれからのものである、それは勿論現実そのものに於て云えば最初のものであろうけれど。吾々の行き方は、抽象的な諸形式が自立的に存続するものとしてでなくて真当でないものとして自己を示す、という行き方である。

ⁱ 『法哲学要綱』を指す。

„Grundlinien der Philosophie des Rechts“

[zu § 32 Anm.]

Die Entwicklung des Begriffs in der Wissenschaft und in
seinen daseienden Gestalten.

Zusatz.

.....

In den empirischen Wissenschaften analysiert man gewöhnlich das, was in der Vorstellung gefunden wird, und wenn man nun das Einzelne auf das Gemeinschaftliche zerrückgebracht hat, so nennt man dieses alsdann den Begriff. So verfahren wir nicht, denn wir wollen nur zusehen, wie sich der Begriff selbst bestimmt, und tun uns die Gewalt an, nichts von unserem Meinen und Denken hinzuzugeben. Was wir auf diese Weise erhalten, ist aber eine Reihe von Gedanken und eine andere Reihe daseiender Gestalten, bei denen es sich fügen kann, daß die Ordnung der Zeit in der wirklichen Erscheinung zum Teil anders ist als die Ordnung des Begriffes. So kann man z. B. nicht sagen, daß das Eigentum vor der Familie dagewesen sei, und trotzdem wird es vor derselben abgehandelt. Man könnte hier also die Frage aufwerfen, warum wir nicht mit dem Höchsten, das heißt mit dem konkret Wahren beginnen. Die Antwort wird sein, weil wir eben das Wahre in Form eines Resultates sehen wollen und dazu wesentlich gehört, zuerst den abstrakten Begriff selbst zu begreifen. Das, was wirklich ist, die Gestalt des Begriffes, ist uns somit erst das Folgende und Weitere, wenn es auch in der Wirklichkeit selbst das erste wäre. Unser Fortgang ist der, daß die abstrakten Formen sich nicht als für sich bestehend, sondern als unwahre aufweisen.

i 底本では "hinzugeben" であるが、いくつかの独書ではこうだ。

(2) 『エンチクロペディー』【九十六節 補遺の最後の段落】より

2 アウフヘーベン

アウフヘーベンというと先ず、廢棄する、否定する、を意味し、従って例えば『或る法律或る制度等がアウフヘーベンされた』と言われている。しかしアウフヘーベンは更に**保存する**の意味に用いられる。この意味で吾々は『或る物がよく保存されている』と言っている。同一の言葉が否定的意義と肯定的意義とを有している。かかる言語慣用上の二重の意味は偶然的なものだと看做されてもならず、また困乱をひき起すものとして言語に非難が向けられてもならない、むしろそこには、単に悟性的なる『あれかこれかいずれか一つを』ということを乗り越えたる独逸語の思弁的精神を認識すべきである。

„Encyklopädie“

Erster Teil. Die Wissenschaft der Logik

Erster Abteilung der Logik. Die Lehre vom Sein.

A. Qualität

c. Fürsichsein

aufheben

§ 96

Zusatz.

Unter aufheben verstehen wir einmal soviel als hinwegräumen, negieren, und sagen demgemäß z. B., ein Gesetz, eine Einrichtung usw. seien aufgehoben. Weiter heißt dann aber auch aufheben soviel als aufbewahren, und wir sprechen in diesem Sinn davon, daß etwas wohl aufgehoben sei. Dieser sprachgebräuchliche Doppelsinn, wonach dasselbe Wort eine negative und eine positive Bedeutung hat, darf nicht als zufällig angesehen noch etwa gar der Sprache zum Vorwurf gemacht werden, als zu Verwirrung Veranlassung gebend, sondern es ist darin der über das bloß verständige Entweder-Oder hinausschreitende spekulative Geist unserer Sprache zu erkennen.

(3)『法律哲学』『要綱』序論第三十一節』より

弁証法

一般的なものの諸特殊態を解消するのみならずまた産出するものとしての、概念の動力原理、これを私は**弁証法**と呼ぶ。——弁証法と云つても、それが感情や直接的意識に一般に与えられた対象・命題・等々を解融し・混乱せしめ・彼方此方へと導きそして唯その反対物の導出のみをこととする——これは屢々**プラトン**に於てもあらわれた所の一つの消極的な仕方である——という意味に於てではない。後者の意味に取るならば、弁証法は一つの表象の反対物を、若しくは古代懷疑主義がなした如く決定的に表象の矛盾を、若しくは又朦朧たる仕方で真理への或る接近を、すなわちひとつの現代的途中半端を、弁証法の終極的結果と見做すことが出来る。概念のより高い弁証法は、規定を単に限界ならびに反対物としてではなく、その規定の中から**積極的**内容及び結果を産出し且つ把捉することである、而かもこのことによつてのみ該規定は発展であり且つ内在的進行であるのだ。然るときは、この弁証法は主観的思惟の**外面的**所作ではなくて、その枝及び果実を有機的に驅り出すところの内容の**固有の霊**である。その理性の固有の活動としての理念の発展を、主観的なものとしての思惟は、彼の側で一つの附加物をも附け加えることなしに、唯だ見まもるのみである。或物を理性的に考察するとは、対象に向つて外部からひとつの理性を齎らしそしてかくすることによつて対象を加工することではなく、否、対象はそれ自身で理性的なのである。実にここにあるものは、自由性に於ける精神、自らに現実性を与え且つ存在するものとして世界を創造する所の・自己意識の理性の最高の頂である。科学は単に、事態の理性のこの固有の労作を意識に持ち来す、という仕事を持つのみである。

Dialektik

„Grundlinien der Philosophie des Rechts“

Einleitung

§ 31

Das bewegende Prinzip des Begriffs, als die Besonderungen des Allgemeinen nicht nur auflösend, sondern auch hervorbringend, heiße ich die Dialektik – Dialektik also nicht in dem Sinne, daß sie einen dem Gefühl, dem unmittelbaren Bewußtsein überhaupt gegebenen Gegenstand, Satz usf. auflöst, verwirrt, herüber- und hinüberführt und es nur mit Herleiten seines Gegenteils zu tun hat – eine negative Weise, wie sie häufig auch bei Platon erscheint, Sie kann so das Gegenteil einer Vorstellung, oder entschieden wie der alte Skeptizismus den Widerspruch derselben, oder auch matter Weise eine Annäherung zur Wahrheit, eine moderne Halbheit, als ihr letztes Resultat ansehen. Die höhere Dialektik des Begriffes ist, die Bestimmung nicht bloß als Schranke und Gegenteil, sondern aus ihr den positiven Inhalt und Resultat hervorzubringen und aufzufassen, als wodurch sie allein Entwicklung und immanentes Fortschreiten ist. Diese Dialektik ist dann nicht äußeres Tun eines subjektiven Denkens, sondern die eigene Seele des Inhalts, die organisch ihre Zweige und Früchte hervortreibt. Dieser Entwicklung der Idee als eigener Tätigkeit ihrer Vernunft sieht das Denken als subjektives, ohne seinerseits eine Zutat hinzuzufügen, nur zu. Etwas vernünftig betrachten heißt, nicht an den Gegenstand von außen her eine Vernunft hinzubringen und ihn dadurch bearbeiten, sondern der Gegenstand ist für sich selbst vernünftig; hier ist es der Geist in seiner Freiheit, die höchste Spitze der selbstbewußten Vernunft, die sich Wirklichkeit gibt und als existierende Welt erzeugt; die Wissenschaft hat nur das Geschäft, diese eigene Arbeit der Vernunft der Sache zum Bewußtsein zu bringen.

本書を読む人々のために

本書を読む人々のために

本書の読者は、まづ最初論文の三『論理的なものの三側面』の第二節の補遺（三十二頁）から読みはじめられることをお勧めする。ここには吾々に最も熟知されている知力すなわち悟性的思惟の本領が展開されている。そしてこの一文は決して理解に困難なものではない。試みに吾々は次の文章を読んでみよう。『一個の人間として一定の事情中であって何事か仕遂げようとするならば、一定の何ものかに固執せねばならぬ。彼の力量を多方面に散乱さしてはならない。どの職業に於てもそうである、職業は悟性でもって営まれる。例えば、裁判官は法律に固執し、これに従って判決を下さねばならぬ。右顧左眄し、宥恕を構えることがあってはならぬ。——のみならず一般に悟性は訓練の一つの本質的要素である。訓練ある人は曖昧、不定のことに満足しない。対象をしっかりと明晰に把える。反之、訓練なきものは覚束なげに蹢躅している、そういう人と問題となる事柄について相談し、問題となれる一定の点に判然とわき眼をふらず着目させるには随分骨の折れることである。』

職業は悟性でもって営まれる。凡そ人間にとって生きてゆくための職業についての知力ほど強健のものはないではないか。読者はまずヘーゲルが、かかる強力なる・がしかし固定性及び抽象性を充分に具えている・悟性的思惟に、着目していることを、深く注意して欲しい。しかしその悟性は職業上の知識、日常生活上の知力に於てのみならず、芸術・宗教・哲学に於て欠かれてはならぬことは勿論、稀薄であってはならぬことを、ヘーゲルは語っている。『哲学も亦悟性を欠くことのならぬことは、尚特に贅言するを要しない。哲学に於ては何は措いても、どの思想も充分劃然と捕捉されればならず、且つ曖昧な不鮮明な点で諦めてはならぬことが、必須事である。』

特にヘーゲルの解する悟性を、哲学の中に導き込み、而も論理学の中にその地位を見出し、尚更に、弁証法論理の謂わば発足点とし

たことは、ヘーゲルを描いて他の如何なる哲学者にもこれを見出すことができない。本書の読者は一応何よりもこの二節の補遺の綿密な貪欲な読者であつて欲しい。そしてこのとき、論文の六『悟性に於ける移行作用』をも合せて読まれるならば、何をヘーゲルが悟性と呼んでいるかが、一層明瞭となるであろう。しかし、この六は或いはまだ理解に困難なるものを見せるかも知れない。しかし、それは三全体の熟読、渉猟の後には、大した困難とはならないであろう。以上でもって、読者はヘーゲル弁証法を正当に把握する第一歩を誤ることから、免れるであろうことを私は確信する。何故そうであるか？

所謂現代哲学は、ヘーゲルの所謂悟性を、全く忘却せるかたちである。今日の哲学に於ける現実の逃避、実践の蔑視は、この悟性の忘却となつて現れている。ヘーゲルの所謂悟性は人間生活の大道である。科学もまたこれを離れては成立していない。殊に哲学はそうである、ヘーゲルは言う、『科学の悟性的形式は万人に開かれ、万人に対して平かにされた科学への道である、悟性を通して理性的知識に達せんとするは、科学に踏み入る意識の正当な要求である。何故というに悟性は思惟であり、純粹自我一般である。而して悟性的なるものはすでに熟知されたものであり、科学と非科学意識とに共通なるものである、これあるによって後者が直接に前者に這入つてゆくことができる。』これはヘーゲルの大著の内最初のもの、『精神の現象学』（一八〇七年）中にあらわれた彼の悟性解釈である。しかし、この程度の悟性解釈であつたならば、特にヘーゲル固有の思想と見るべきほどのものではない。此処まではどの哲学者もヘーゲルと同行する。多くの哲学者はここで悟性と絶縁する。ヘーゲルは截然と、彼の哲学者に対する彼の独特の傾向をここに（著書で言えば、『エンチクロペディ』（一八一七年））示しはじめる。ヘーゲルに於ては、万人に開かれた悟性の道は哲学の中へと導かれてゆく。しかし、その俚連続的に導かれ込むのではなく、揚棄に於てであることは、言うまでもない。所謂現代の哲学は如何にこぞつて悟性か

本書を読む人々のために

ら厭離^{えんり}せるかは歴々として指摘することができよう。一方、人間若しくは生命を遠ざかれる哲学説は、遠く地を離れて『純粹』の空に懸っている。他方、人間を語り社会を言う哲学説は（ヘーゲルの言葉を借れば）『北方神話に於ける神々の姿のように不分明の霧の中で流れ合っている。』現代の人間生活の実践の錯節^{さくせつ}を鮮明に截断^{せつだん}するの力を持たない。多くの現象学派の哲学者は前者に、ディルタイ的傾向にあるものは後者に属す。純化されたる人間的なるものが僅かに取入られて前二者の間に彷徨せるものをハイデッガーであると言っても逸言ではなかろう。――以上でもって、何故にヘーゲルの悟性解釈への強き吾々の留意が、ヘーゲル弁証法の理解の鍵であるかが。理解できよう。

次に読者の通読を待っているものは、論文の三『論理的なものの三側面』の全体である。ヘーゲルはここで、論理的なるものが何であるかを示すことによって弁証法を定式的に呈露させようとしている。弁証法が何であるかを直截に知ろうとするには、或いはこの論文の第三節（四十頁）がその用に立つであろうが、科学的に組織的に弁証法を掴まんとするには、『論理的なもの』の理解を経なければならぬ。のみならず、論理的なものの三側面の一つとして、先きの悟性的思惟が挙げられてあるに於ては、尚更のことである。

かの三つの側面は、論理的なもの、実有的なるもの、即ちあらゆる概念の、若しくはあらゆる真なるもの一般の諸契機であることに、強く注目し置き、二、三、四節を通読すべきである。しかし、この三側面が、若し悟性的なもの（契機としては第一契機としてあらわれているところのもの）の下に置かれるときは、孤立せしめられてしまい、もはや真理性に置ては見られていないことをも、合わせて、つねに留意すべきである。ここでも亦通読の後には特に補遺の部分の理解につとめることが、理解を大層容易ならしめるであろう。尚、かの三つの側面が、論理的なるもの、あらゆる真なるもの一般の諸契機であるが、これに対してヘーゲルは弁証法的なるものを次の如くに掴んでいることを、注意すべきである、『弁証法的なるものは

一般に、一切の運動、一切の生命、現実には於ける一切の実行の原理である』(四十四頁)

論文三の『論理的なものの三側面』の第三節と共に、論文二の『弁証法』を参照しつつ読まれるならば、読者は簡単なる弁証法史に接するであろう。

次に、論文の四『純粹有の弁証法』は、弁証法を哲学史の発展につけて極めて理解し易く解明してくれるであろう。論文の一『矛盾に就て』は、弁証法が吾々の身の如何なる事物の中にも存在することを、指示してくれるに役立つであろう。

論文の五『質と量及びその転化』は、公式的に弁証法を理解した読者が、実際に当ってあらゆる事物の中に弁証法を発見することの手引となるであろう。ヘーゲル論理学の中の最も興味多き部分の一つである。六の『絶対的理念』と九の『弁証法断片』中の『科学に於ける概念の発展とその定在形体に於ける概念の発展』とはヘーゲルの科学の方法について、その要領を簡明に教えてくれる。ヘーゲルの科学的な科学的方法を知らんとするものにとって必須の文献である。殊に後者の如きは、マルクスの所謂正当なる科学の方法の洞見に対して直接指示するところのあったものと察せられる。尚、『絶対的理念』についてであるが、絶対的理念は、ヘーゲル論理学の最頂点である。けれどもこの理念の意義は正解されねばならない『ここに至ってはじめて本物が出る、ここでもそ一切が解らねばならぬ』というような、人々のいだきがちな臆見を取払うべきである。以上の編者の注意は、本書の読者に対して蛇足に終るものでないことを確信する。

底本：『原文対訳ヘーゲル弁証法』 昭和五年七月二十日・昭和六年七月十日
第三版 人文書房

作成者：石井彰文

作成日：2016.12.11